平成 26 年度
総合的な教師力向上のための調査研究事業
（文部科学省委託事業）

アクションリサーチ的アプローチによる実践的力量の育成プログラムの開発

― チームで創る体育授業 ―

プロジェクト代表
鈴木直樹（東京学芸大学）

プロジェクトメンバー
矢嶋昭雄（東京学芸大学）・大澤克美（東京学芸大学）
石井卓之（東大和市教育委員会）・久保田哲司（東京都教職員研修センター）
上野佳代（附属小金井中学校）・笠松具晃（附属小金井小学校）

事務局
中村有希・島貫由起子・工藤悠仁

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、東京学芸大学が実施した平成２６年度「総合的な教師力向上のため調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。

東　京　学　芸　大　学

はじめに

平成 26 年度，文部科学省から委託を受けて「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に取り組んで参りました。私たちは,「アクションリサーチ的アプローチによる実践的力量の育成プログラムの開発」を目指し,本年度は体育科に焦点化して「チームで創る体育授業」をテーマに掲げて取り組みを進めてまいりました。一年間を終えて,ホッとしていると同時に,大きな充実感を得ることができました。多様な視点の中で,それを受け入れる中でこそ新たな創造が生まれることが実感できた一年間でした。

下記は,参加者の一人が綴った全体研修会後の感想です。

私、小学生の頃までは、体育は苦手だけどボールで遊ぶのは好きでした。
でも、中学一年生のバスケットボールの授業で、いつもボールがこないところ、ボールから離れたところにいる私に、先生が、積極的にボールをとりに行け、声を出せ、と言ったんです。そもそもそういうことが苦手だった私にはそれが出来ず、やはり離れたところにいると、先生はみんなに、ボールを私に回すように言いました。だから、どこにいても、どんなに遠くからでも、私のところにボールが飛んでくるようになり、取れないとまわりから、「よく見て、ちゃんと取って！」と言われるようになりました。私は、まわりに怒られないよう、飛んでくるボールを取ることだけに必死になっていたと思います。
ボールに触れれば楽しくなって、バスケが好きになるだろうと考えたのかもしれない先生の考えは、私には逆効果で、前よりもボールが怖くなり、逃げ場もなくなった私は、バスケも体育も嫌になりました。バレーボールのように打ち込まれてくるボールは、もっと怖い…。無意識に、怖くて目を閉じてしまったり体が逃げてしまうので、上達するわけもなく楽しさも分からない。
球技への苦手意識だけが強くなっていき、ボールで遊ぶのが好きだったことなど、今話すまで忘れていたくらいです。

「ボールゲーム」の中でボールに触れなければつまらないということは,あたかも当然のことのように意識されていますが,視点を変えてみるとそういった「常識」が「非常識」であったことを痛感させられた感想文でした。このプロジェクトの取り組みの中では,こんな自分たちの当たり前が揺さぶられる経験の数々でした。したがって,プロジェクトの始まりはストレスも多かったと思います。プロジェクトリーダーである私に活動を示してほしいというメッセージも強く伝わってきました。しかし,そこは敢えてチームで乗り越えてくれるように細かなことを示さずに取り組みを進めていきました。その探索的な取り組みの中で,自分達の歩く道を見つけ,暗闇の中に光を見つけたのは,「協働」という力であったと思います。個別だった個々人が,つながりを求め,つながり合い,いつしか成長を互いに支えるコミュニティへと育っていく…そんな場がこのプロジェクトでした。

平成 27 年 2 月 10 日には 180 名を超える参加者を迎えて公開発表会も実施することができました。そこでは,このプロジェクトの成果の一旦をみて頂くことができたと思います。

この報告書は,そんな私たちの歩みと歩みを振り返った感想をまとめたものです。

お読みいただき,今後の教員研修あるいは教師教育の在り方について「協働」して考えていく為の第一歩を築いて頂くことができれば幸いです。今後の研究に向けて,忌憚のないご意見を頂くことができれば幸いです。

平成 27 年 3 月 13 日

プロジェクト代表
鈴木直樹（東京学芸大学・准教授）

もくじ

はじめに

第１章　研究の概要・・・・・・・・・・・・・・１

第２章　先行事例の調査・・・・・・・・・・・・10

第３章　研修の取り組み・・・・・・・・・・・・16

第４章　研修参加者の感想録・・・・・・・・・83

第1章　　研究の概要

第１節　総合的な教師力向上のための調査研究事業　事業計画書

実施テーマ	□　初任者研修の抜本的な改革　※　別紙様式１－１による。
	□　教師塾の拡充
	■　教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発
	□　管理職を養成する仕組みの確立
	□　教員免許状を持たない専門的な知識・技能のある優れた人材登用の促進

調 査 研 究 主 題	アクションリサーチ的アプローチによる実践的力量の育成プログラムの開発

調査研究実施機関		
機　　関　　名		（　国立大学法人東京学芸大学　）
代　　表　　者	職　　名	学長
	（ふりがな）	でぐち　としさだ
	氏　　名	出口　　利定
事業実施責任者	所属部署・職名	教育学部・芸術スポーツ科学系・准教授
	（ふりがな）	すずき　なおき
	氏　　名	鈴木　　直樹
	電　話　番　号	０４２－３２９－７６４５
事務連絡担当者	所属部署・職名	財務施設部財務課財務企画第二係・係長
	（ふりがな）	こじま　なおひと
	氏　　名	小島　　直仁
	住　　所	東京都小金井市貫井北町４－１－１
	電　話　番　号	０４２－３２９－７８８３
	ＦＡＸ番号	０４２－３２９－７１４８
	Ｅ－ｍａｉｌアドレス	zkikaku2@u-gakugei.ac.jp

１）実施体制		
所属部署・職名	氏　名	役割分担
教育学部・准教授	鈴 木　直 樹	研究の統括
教育学部・教授	矢 嶋　昭 雄	
教育学部・教授	大 澤　克 美	
東大和市教育委員会 学校教育部・参事兼 指導室長事務取扱	石 井　卓 之	計画の作成と実践校との調整
東京都教職員研修センター専門教育向上課・指導主事	久保田哲司	現職研修との調整
附属小金井中・教諭	上 野　佳 代	中学校での授業実践のメンター
附属小金井小・教諭	笠 松　具 晃	小学校での授業実践のメンター

２）課題認識
一人ひとりの子どもの実態に応じた授業づくりが求められる中，大学において実践的力量を育む取り組みとして模擬授業が多く取り入れられるようになってきた。しかしながら，これは大学生を相手にした取り組みであり，実際の授業の文脈の中における指導実践とは異なったものになっているのが現状である。また，教育実習では子ども達の実態を踏まえ，学生たちが実際に授業構想と授業実践を行っているが，大学で学んだことを十分に生かし切れていない。これは現場の教員と大学の教員との間に認識のズレがあることが一要因としてあげられる。本研究は，このような課題に，アクションリサーチ的なアプローチから取り組むものである。

３）現状の取組
平成 25 年度には，東大和市教育委員会の協力を得て，東大和第 9 小学校の放課後の時間に第 4 学年から第 6 学年の希望者を募り，大学院生が 4 つのグループを作り，授業リフレクションを繰り返しながら，授業改善に取り組み，6 時間分の授業を実践した。また，その後，同様の学生を対象として附属中学校において 3～4 時間の単元を構成し，授業づくりと授業実践を行った。附属中学校では，さらに 3 年生 6 名にも演習で学んだことを活かして授業実践に取り組ませた。その結果，教師としての力量形成の変化を実感するとともに，具体的な授業改善の視点を得ることができた。本事業はこれを基盤に発展させていく。
３－A）教育委員会・大学・（独）教員研修センター等との連携
３－a）連携の有無

連携先の種類	有　無	具体的な連携先
教育委員会	■ 有 □ 無	（ 東大和市教育委員会、東京都教職員研修センター）
大学	■ 有 □ 無	（ 東京学芸大学 ）
（独）教員研修センター	□ 有 ■ 無	（ ）
その他	■ 有 □ 無	（ 東京学芸大学附属小金井小学校／中学校 ）

３－b）連携内容（連携先がある場合は、記入すること。）
附属小学校と附属中学校で，大学教員と附属学校教員を含めて授業実践を構想し，実際に取り組みながら，授業実践上の見通しを持つようにする。その実践をベースにして，東大和市の体育研究グループと協働で，授業を考え，リフレクションしながら，授業実践を繰り返し行い，よりよい授業実践を目指しながら取り組んでいくことで，教師としての力量形成を支援する。そこで，東大和市教育委員会の協力を得て，東大和市内の教員を中心にした研究グループを構成し，そこに大学教員と大学院博士課程と修士課程の学生も含めた学生の実践グループが加わり，アクションリサーチ的に授業実践に取り組んでいく。また，東京都教職員研修センターの協力を得て，初任者研修や年次研修のプログラムと関連させた取り組みも考えていきたい。なお，この発展として，学芸大学の 2 年生を対象として実施している「模擬授業演習 A」の授業プログラムにも実際の小中学生に対して指導をしながら力量形成を図ることができるようなプログラムを開発していく。

４）調査研究の目的
本調査研究の目的は，アクションリサーチ的なアプローチによる学生の授業実践体験が，教師としての力量形成に及ぼす影響について調査し，教員養成カリキュラムの改善に資するプログラムを開発することである。

５）調査研究の具体的な内容・取組方法
本研究で目指すのは，実践的力量を高める教師の育成に資するプログラム開発である。その為，以下，3点に取り組んでいく。 １）　Professional Development ではなく，Professional Learning という言葉が最近の教師教育の研究ではよく聞かれるようになった。本研究では，このような教師自らが実践の中で学んでいくことができるような力量形成を目的としている。そこで，アクションリサーチ的な手法を用い，大学教員，現場教員，学生が協働して授業改善に取り組み，授業実践をしていくことができるプログラムを開発していく。その為に，以下，5 段階に分けて実施を行う。 ①　先行研究の調査。 ②　プログラム開発に向けた検討。 ③　附属学校での授業実践（小グループへの指導）。 ④　東大和市内での授業実践（小グループへの指導）。 ⑤　東大和市内での授業実践（一クラスを対象にした指導）。 ２）　開発したプログラムの実践を行い，学生の教師としての力量形成の向上を検証していく。 ①　鈴木（2006）が明らかにした教師の観察の特徴や石塚（2014）が明らかにした教師の意思決定の特徴に注目し，その変化を明らかにしていく。検証には，アイカメラを活用したり，半構造化面接を行い，その内容を質的に分析したりしていく。 ②　鈴木ら（2014）が開発した教師の出口スタンダードに基づき，評価（自己評価・他者評価）を行い，プログラムの実施前後の違いを比較する。 ③　授業をビデオ撮影し，教師の四大行動（高橋ら，1991）にしたがって，パフォーマンス分析をし，その変化を量的に検証する。 ３）開発したプログラムを教員養成カリキュラムの中に位置づけ，カリキュラム開発を行う。

６）調査研究における教育委員会・大学・（独）教員研修センター等との連携		
６－１）連携の有無		
連携先の種類	有　無	具体的な連携先
教育委員会	■ 有　□ 無	（　東大和市教育委員会、東京都教職員研修センター）
大学	■ 有　□ 無	（　東京学芸大学　）
（独）教員研修センター	□ 有　■ 無	（　）
その他	■ 有　□ 無	（　東京学芸大学附属小金井小学校／中学校　）
６－２）連携内容（連携先がある場合は、記入すること。）		
①　東大和教育委員会には，公立小中学校での実践のマネジメントをお願いする。 ②　東京都教職員研修センターには，年次研修や希望研修と教員養成カリキュラムを連携させていく可能性について検討してもらい，具体化を目指す。 ③　附属学校には，公立学校に出る準備段階と位置付けた授業実践を依頼し，その内容について附属学校教員に具体的に指導を頂く。		

７）調査研究の実施計画	
４月	①　研究の方向性についての打ち合わせ。 先進的な取り組みの視察。
５月	②　先行研究についての検討。 取り組みの可能性を明らかにする。 先進的な取り組みの視察及び調査を実施する。
６月	③　プログラムの具体的内容と研究方法の提案
７月	④　プログラムの開発と研究方法の決定
８月	⑤　プログラム実施の準備（その１） 夏季の教職員研修プログラムに学生も含めて学ぶ場を設定（予備調査）
９月	⑥　プログラム実施の準備（その２） 学生と現職教員のワークショップの実施（予備調査）
10 月	⑦　プログラムの実施とその検証__附属校
11 月	⑧　プログラムの実施とその検証__東大和（その１）
12 月	⑨　プログラムの実施とその検証__東大和（その２）
１月	⑩　報告会の実施 ＊コメンテーターを招聘しての報告会（パネルディスカッション方式も検討）
２月	⑪　調査報告書の作成
３月	⑫　調査報告書の配布

第２節　研究の実績

（１）事業の実施日程

事業項目	実施日程											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
先行事例の視察	↔	↔	↔	↔								
全体研修会					↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
アクションリサーチ（１）					↔	↔	↔	↔	↔			
アクションリサーチ（２）									↔	↔	↔	
公開研究会											↔	

（２）事業の実績の説明

本事業は，東京学芸大学と東大和市の連携によって実現されたものである。４月～７月にかけては「アクションリサーチ的手法を活用した研修」を導入していくために，先行事例を調査した。その結果，教師の成長における異質な他者との出会いが研修のポイントであるということが明らかになった。また，その異質な他者の関係が対話（対立・対等・対面）できる関係であることが明らかになり，このような関係を作り出していく為の仕組みについて議論がなされた。その結果，「チームで創る体育授業」を掲げ，大学生・指導主事・教員の立場の違うものが，「よりよい体育授業」を目指すという目標のもとに協働していく取組を行うことにした。それと連動させ，チームを横断して全体で集まり，考え方をシェアするような定例会を実施することにした。定例会では，教育について直接考えるというよりは，教育以外の分野で活躍している方から見た教育について語ってもらい，それを手掛かりに教育を見つめ，考える場面を設定することにした。そこで，第１回目を８月に実施し，その後，「グループでのアクションリサーチ」と「定例会」を軸にして研究プロジェクトを進めていった。なお，先行事例の調査から対話関係のあるチームにしていくために「懇親会」を大切にして，定例会や研究グループの集まりの後には，積極的に懇親の場を設定するようにした。

アクションリサーチでは，４グループ（小学校３グループ，中学校１グループ）で，よい授業像を話し合い，その実現に向けたチームでの取組を話し合った。そして，実際に授業分析や協議を重ねながら研究を進めていった。その中で，「教師が学生を指導していく」という関係から「共に創り上げる」コミュニティに変容し，授業づくりの変容と同時に参加者の教師力の向上が見られた。この取組のまとめとして２月１０日には，公開研究発表会を実施し，全国各地から１８０名を超える参加者を迎えて成果を報告することができた。

第３節　研修会参加者名簿

		氏名	役割	所属	
1		鈴木　直樹	プロジェクトリーダー	東京学芸大学　准教授	PJ メンバー
2	小学校①	笠松　具晃		東京学芸大学附属小金井小学校	PJ メンバー
3		久保田　哲司		東京都教育センター	PJ メンバー
4		阿部　隆行		東京学芸大学博士課程　2 年	院生
5		田上　瑞恵		東京学芸大学修士課程　3 年	院生
6		野々村　鮎美	グループリーダー	東京学芸大学　2 年	学部生
7		篠原　弘樹		東京学芸大学　3 年	学部生
8		貝原　明紘		東京学芸大学　2 年	学部生
9		柄澤　周		東大和市立第三小学校	現職教諭
10		中井川　ゆうか		東大和市立第一小学校	現職教諭
11		佐藤　慎平		東大和市立第四小学校	現職教諭
12		嶺岡　将太		東大和市立第四小学校	現職教諭
13	小学校②	石井　卓之		東大和市教育委員会	PJ メンバー
14		成家　篤史		東京学芸大学博士課程　1 年	院生
15		中村　有希	事務局長	東京学芸大学　研究生	院生
16		藤澤　潤	グループリーダー	東京学芸大学　4 年	学部生
17		戸川　雅子		東京学芸大学　2 年	学部生
18		久保　州		東京学芸大学　2 年	学部生
19		真野　妙子		東大和市立第三小学校	現職教諭
20		鬼澤　亮太		東大和市立第三小学校	現職教諭
21		鈴木　進也		東大和市立第十小学校	現職教諭
22		松枝　秀甫		東大和市立第六小学校	現職教諭

23	小学校③	小野　隆一		東大和市教育委員会	PJ メンバー
24		河野　素乃		東京学芸大学修士課程　2 年	院生
25		工藤　悠仁		東京学芸大学修士課程　1 年	院生
26		内田　真生子	グループリーダー	東京学芸大学　3 年	学部生
27		本田　聖栄		東京学芸大学　2 年	学部生
28		竹盛　智彦		東京学芸大学　2 年	学部生
29		薩田　智仁		東京学芸大学　2 年	学部生
30		蓑　泰男		東大和市立第三小学校	現職教諭
31		越智　雄大		東大和市立第八小学校	現職教諭
32		川口　徹		東大和市立第七小学校	現職教諭
33		茂田　要介		東大和市立第九小学校	現職教諭
34	中学校	上野　佳代		東京学芸大学附属小金井中学校	PJ メンバー
35		矢嶋　昭雄		東京学芸大学	PJ メンバー
36		齋藤　祐一		東京学芸大学博士課程　3 年	院生
37		横山　彩		東京学芸大学修士課程　1 年	院生
38		鴨下　達郎	グループリーダー	東京学芸大学　4 年	学部生
39		豊嶋　祐也		東京学芸大学　3 年	学部生
40		阿部　里彩子		東京学芸大学　3 年	学部生
41		坂本　恵		東大和市立第一中学校	現職教諭
42		今西　夏来		東大和市立第二中学校	現職教諭
43	事務	島貫　由紀子	事務局		

第２章　先行事例の調査

－視察校－

１）　上越教育大学

２）　佐賀大学（調査結果掲載）

３）　山口大学（調査結果掲載）

石井　卓之
笠松　具晃

佐賀大学視察報告

Ⅰ：1年後期　観察
Ⅱ：2年後期　授業作り（6人グループ）
Ⅲ：3年前期　授業・評価の開発

教育実践フィールド演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

教育実践フィールド演習Ⅰ

学生の声
「ただ見るだけ」
「責任がない」

- 目的：観察→
  - ○子どもの実態
  - ○子どもの発達段階
  - ○子どもとのコミュニケーションの取り方
- 期間：第1学年後期30時間
  （火曜1・2限　8回程度の小学校での体験活動）
- 実習校：佐賀市内小学校（10校）

教育実践フィールド演習Ⅱ

学生の声
「3年実習時の
自信となる」

- 目的：実践→
  - ○学習指導案作成（6人グループ）
  - ○資料、教具の開発
  - ○授業実習（単元の1・2時間目を担当）
- 期間：第2学年後期30時間（月曜1限）
  実習校での授業参観と指導、授業実習
- 実習校：附属小・本庄小（代用附属）

教育実践フィールド演習Ⅲ

- 目的：授業・評価開発→実習校から課題
  - ○学習指導案作成（3人グループ）
  - ○資料、教具の開発
  - ○模擬授業（実習授業につなげる）
- 期間：第3学年前期30時間（木曜6限）
  実習校での授業参観と指導、授業実習
- 実習校：附属小・本庄小（代用附属）

教育実践フィールド演習Ⅲ（授業参観）

教育実践フィールド演習Ⅲ（実習校指導）

- 担任指導
- 教科指導

※体育科学生は体育が
専門の教員のクラス
に配当される。

教科の専門性を高める

教育実践フィールド演習Ⅲ（大学講義）

- 実習校事前指導
  ↓
- 学生から実態報告
  ↓
- 大学講義（復習）
  ※理論と実践を結ぶ

教育実践フィールド演習Ⅲ（模擬授業）

- 実習校からの課題
- 指導案作成
- 資料・教具の作成
- ［模擬授業］
- 反省

９月からの教育実習（4週間）への準備

体育科教育法

- Ⅰ：教室での講義（堤先生）
- Ⅱ：模擬授業
  ［スケジュール］
  3週間前：構想会
  2週間前：指導案検討会①
  1週間前：指導案検討会②

体育科教育法Ⅱ

- 他教科3年生
  （10人グループ）を
  体育科3・4年生が指導
- 院生がコーディネーター
- 資料
  「小学校体育なるほどハンドブック」
  「小学校の体育授業作り入門」
  ※インターネット不可

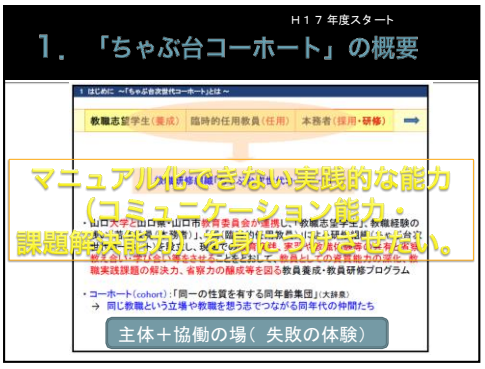
授業作りのプロセスを学ぶ

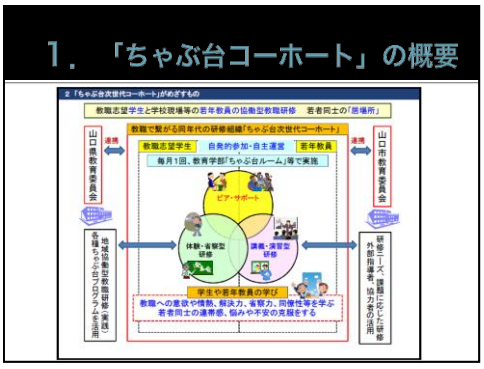
体育科教育法Ⅱ（模擬授業）

佐賀大学視察のまとめ

「佐賀大学では
教育学部が
一番忙しい…」
（学生談）

- 実践的指導力の育成　コミュニケーション力
  体験（模擬授業）←→省察（リフレクション）
- 現場とのつながり（指導対象が明確）
  附属小、市内協力校
- 専門性の高まり
- 学生主体の授業
  他学年や他教科学生との学び合い





２．担当者への聞き取り

- 行政研修でやれない／やらないことをやる。（
- ミドルリーダーの育成として現職の講師を呼ぶ（ 5年―10年経験者教員）（
- 懇親会を必ずセットにして行う。

教員研修に大学がかかわらなければいけない！

- 学校で経験すれば、教師の力量が形成されるという勘違いがある。スーパーバイズを受けながらの現場での経験を前提とする。（

2．担当者への聞き取り

「ちゃぶ台」とは？

- 実体概念ではなく，分析道具概念

「ちゃぶ台」という理念に支えられてプログラムが存在するべきである！
（社会科教育講座：南浦先生）

3．参加学生への聞き取り

理科ちゃぶ・理科ボランティア受講生

3．参加学生への聞き取り

小学校教育コース４年生へのインタビュー

Ｔ（大学2年より参加）	Ｏ（大学3年より参加）	Ｋ（大学3年より参加）
授業で紹介されてはじめようと思った。		
・先生方のフレッシュさ や二次会での盛り上がりに驚いた。 ・実践的なことを学び教 壇に立ちたい。 ・出会いと学びがあるのが魅力。＜温かい場・動機づけられる場＞	・現場の教員に教えてもらう機会（教員に意見することはあまりない）。 ・頼れる先輩の存在。 ・学級崩壊をしない！	・教えてもらうという感覚が強かったが，少し ずつ意見ができるようになった。 ・参加すると何かが得られる気がする。
命の教育をテーマにした講師の話に感激し，影響	ＩＣＴの活用に関する研修がためになった	経験・体験・思考を現職教員に支えてもらってい

4．参加教員への聞き取り

Ｉ教諭

4．参加教員への聞き取り

Ｓ教諭（中学校社会）７年目（臨採3年含む）		Ｉ教諭（小学校）２年目
２年生からはじめて９年目		３年生からはじめて４年目
霜川先生にあこがれて	きっかけ	大学の先輩に誘われて
・同じ講義を受けたのに感覚が違う。 ・学生をまとめないといけない。	学生への認識	・学生は最先端の情報をもっている。（教育実習にたくさん来てほしい）
	学んだこと	・チームで悩みを共有することを学び，人に頼ることの重要性を学んだ。
・１００円ショップで１０００円以内で買い物をして教材づくり ・ピエロの方の講義	印象に残っていること	・ジェントルハームPJを受講し，自殺の見方が変化した。
・楽しいから行く。懇親会が重要。 ・モチベーションを高めてくれる。 ・ネットワークづくり。	よい点	・お馴染みの先生と近況報告をしながらかかわっている気がする。
・特になし	改善点	・参加している教員の授業を実際に参観したい。

IG教諭へのインタビュー

IG教諭へのインタビュー

IG 教諭（小学校：家庭）6年目	
２年生からはじめて６年目	
霜川先生に相談に行ったときに紹介されて始めた。	きっかけ
・学生は貪欲だと感じる。　２３分頃 ・一緒に学ぶ同志。部活の後輩のような感じ。　２８分頃 （教師は完全ではなく，成長していく存在であることに気づかされる場）	学生への認識
・同じ志をもつ人同士をつなぐ場所である（出会える場） ・教育者としての自分に火をつける場所である。　ビデオ	学んだこと
・「授業を語る」という経験が印象的。学生時代から連続した経験ができる点がよい。　１８分頃	印象に残っていること
・学生がこんな風におもってたなあ…と振り返ることができる。 ・いいことだけでなく，失敗も教えてくれる。　２５分頃	よい点
・入ってしまえばいいが，外側からは入りにくい。　ビデオ <もったいない> ・学んだことをどう生かしているかを知りたい。	改善点

３と４のまとめ

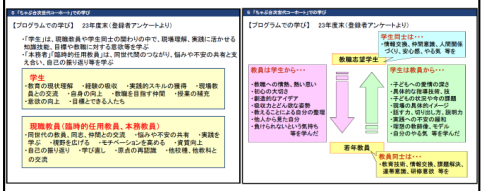
- 現場に出ることへの不安の解消
- 現職の先生から何か教えてほしい
- 刺激を受ける場
- ネットワークづくり
- 講習会を重視

学生

- アイデアをもらう場としての機能から共に考える場への変化
- 学生は未熟であるという認識
- 原点に立ち返る場
- ネットワークづくり
- コーホートとともに懇親会を重視

現職

５．参加学生・教員への聞き取り調査とアンケートの考察



５．まとめ

- 多様な他者が交流する場の提供にとどまっている。
- 主体的に同一の問題解決にあたるところまでは至っていない。
- 講師という存在により，参加者は受動的な学習者という位置づけになっているように思われる。
- 教育委員会の役割がみえない。

第３章　研修の取り組み

研究の歩み

研究内容の検討

○4 月 17 日　　第 1 回運営委員会
○5 月 7 日　　第 2 回運営委員会
○6 月 12 日　　第 3 回運営委員会
○7 月 9 日　　第 4 回運営委員会
○7 月 15 日　　第 5 回運営委員会
○8 月 5 日　　研修会
○8 月 7 日　　研修会
○9 月 3 日　　第 6 回運営委員会

アクションリサーチのスタート

○9 月 16 日　　第 1 回　定例会
・プロジェクトの趣旨説明　・グループ編成
○10 月 10 日　　第 2 回　定例会
「会社経営から学ぶ！！」
講師：地頭薗哲朗（ハウステンボス観光社長）
○11 月 14 日　　第 3 回　定例会
「テレビ番組づくりから学ぶ！！」
講師：菅間和彦（テレビ朝日系「ナニコレ珍百景」チーフプロデューサー）
○12 月 12 日　　第 4 回　定例会
「スポーツコーチングから学ぶ！！」
講師：菊原伸郎（埼玉大学准教授，サッカーS 球ライセンス取得，元浦和レッズ所属）
○1 月 9 日　　第 5 回　定例会
「保護者に声に耳を傾ける・・・。」
講師：島田恵利（一般社団法人教育支援人材認証協会）
○2 月 10 日　　公開研究発表会
○2 月 27 日　　第 6 回　定例会（予定）
「ボール運動・球技　実技研究会」
講師：土田了輔（上越教育大学院教授）
○3 月 13 日　　第 7 回　定例会（予定）
「表現運動・ダンス　実技研究会」
講師：宮本乙女（日本女子体育大学准教授）

第１節　第１回＆第２回の全体会の内容

☆新しいボールゲームの授業づくり　―対話的なワークショップを通して―

＜プログラム＞

第１回：平成 26 年８月５日（火）　１３：３０～１６：３０

受付：13:00 - 13:20　＊グループの指定（5 日は同じグループで活動）　＊ビブスの配布

※受付後に配布されたポストイットに，ボールゲームの授業づくりをする際に悩んでいる点や課題を書いておく。かかえている悩みや課題は全て書くようなつもりで書く。一枚のポストイットには，一つの悩みや課題を書くようにする。

１）開講式：１３：２０―１３：３０　＊着替えてから体育館に集合。

２）演習１：１３：３０－１４：３０

「ボールゲームの授業を体験してみよう！！」

①　小学校のネット型　（授業者：笠松具晃）　25 分

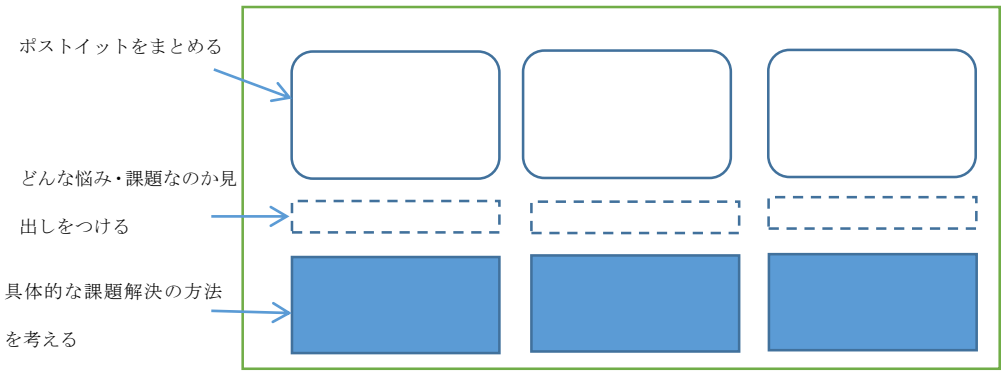
②　中学校のネット型　（授業者：上野佳代）　25 分

＊附属小中学校で実際に実践している授業を体験する。授業後の休み時間中にポストイットに追加して書き込みをする。

３）演習２：１４：４０－１５：４０　（ファシリテーター：鈴木直樹）

「ボールゲームの授業づくりについて語ろう！！」　(GL:上野・笠松・河野・鈴木)

＊学生と現職の先生が混合になった 4 人～6 人グループで，順番に悩みや課題を語っていく。一人の発表者が，模造紙の上にポストイットを出し，同じような内容のものがあれば，他の人もそこにポストイットを出し，語りをしていく。自由に語った後は，課題解決の方法を考えていく。学生は，「ボールゲーム」の授業を実践するという課題に向き合った際に，感じる課題を記述し，発表することにする。また，大学で学んだことをフル活用し，解決の糸口を探っていくこと。これを順番に行い，ポストイットがなくなるまで続けるようにする。



４）演習３：１５：５０－１６：３０

「ドッジボールの教材としての有効性について語ろう！」

①　基調講話：米国の Position Statement の報告（鈴木直樹）10 分

②　グループ討議　30 分

第２回：平成 26 年 8 月 7 日（木）　１３：３０～１６：３０

１）講義１：１３：３０－１４：３０

「ボールゲームの授業づくりの動向」　（鈴木直樹）

２）演習４：１４：４０－１５：４０

「ICT を活用したボールゲーム／球技の授業づくりを考える（戦術学習）」（上野佳代）

＊日本の学習指導要領の改訂の中に見られる「型ゲーム」の表記は，TGfU の考え方に強く影響されている。そこで，TGfU の指導プロセスに忠実な授業実践を体験し，近年のボールゲームの指導の主流と言われる戦術学習について考えてみる。また，ICT 活用が体育でも広がってきている。その一例を紹介する。

３）演習５：１５：５０－１６：３０

フィッシュボウル形式による討論会（ファシリテーター：鈴木直樹）

「ボールゲームにおける教材を考える」

４）閉講式：１６：３０－１６：４０

提案者：

１）東　京　学　芸　大　学　　准教授　鈴木直樹

２）東京学芸大学附属小金井中学校　教諭　上野佳代

３）東京学芸大学附属小金井小学校　教諭　笠松具晃

場　所：東大和市立第三小学校

日にち：平成２６年８月５日＆７日

時　間：１３時３０分～１６時３０

平成 26 年 9 月 3 日（水）

総合的な教師力向上のための調査研究プロジェクト

第 2 節　9 月以降の取り組み

１．9 月以降の取り組みについて

１）アクション・リサーチ的な取り組みの工夫

＊グループ構成の工夫　　・多様性の保障　　・平等性の保障

＜そのための工夫をどうするか？＞

工夫１）リーダーの工夫　　工夫２）会議の開催の工夫　　工夫３）活動の内容の工夫

＊小学校３（石井，笠松，中村？），中学校１（上野）の研究グループを構成する。

＊グループで研究計画を立てる。　＜2 月 10 日の発表に向けてのリサーチ＞

＊グループ研究計画を 9 月の定例会で計画する。鈴木まで提出（9 月末日）。

２）定例会による情報交流と研修

10 月：「会社経営から学ぶ！！」

講師：地頭薗哲朗（ハウステンボス観光社長）

11 月：「テレビ番組づくりから学ぶ！！」

講師：菅間和彦（テレビ朝日系「なんでも珍百景」チーフプロデューサー）

12 月：「スポーツコーチングから学ぶ！！」

講師：菊原伸郎（埼玉大学准教授，サッカーS 級ライセンス取得，

元 J リーガー＜浦和レッズ所属＞，元フットサル日本代表）

1 月：「保護者から見た学校」

講師：島田恵利（都内公立小中学校　元 PTA 会長）

2 月：「ボール運動・球技の実技講習会」

講師：土田了輔（上越教育大学大学院・教授）

3 月：「ダンス・表現運動の実技講習会」

講師：宮本乙女（日本女子体育大学・准教授）

３）・・・附属小学校での取り組み

＊模擬授業演習を附属学校で行う。　→　新プログラム

＊ここで模擬授業を実践してきた学生に 2 月の発表会で授業をさせたい。

第３節　研究運営委員会及び研修全体会の議事録

第１回　運営委員会　（平成 26 年 4 月 17 日）　研究内容について

１．課題認識

一人ひとりの子どもの実態に応じた授業づくりが求められる中，大学において実践的力量を育む取り組みとして模擬授業が多く取り入れられるようになってきた。しかしながら，これは大学生を相手にした取り組みであり，実際の授業の文脈の中における指導実践とは異なったものになっているのが現状である。また，教育実習では子どもたちの実態を踏まえ，学生たちが実際に授業構想と授業実践を行っているが，大学で学んだことを十分に生かしきれていない。これは現場の教員と大学の教員との間に認識のズレがあることが一要因としてあげられる。本研究は，このような課題に，アクションリサーチ的なアプローチから取り組むものである。

・アクションリサーチ･･･大学の教員，現場の先生，大学生が共同参画を通して一つの課題に取り組んで行く。学生も研究していく立場である。
・現場経験のある大学教員でも，昔と今では教育現場が変わってきていることに気づいていない教員が多いのではないか。
・こういう取り組みを体系化して，他の大学でも実践していけるようにする。
・教員の研修でもこのような取り組みを実践していきたい。先生たちが学生指導を通して，自らも学ぶことが保障される。このプロジェクトの核となるのではないか。

２．連携内容

・附属小学校と附属中学校で，大学教員と附属学校教員を含めて授業実践を構想し，実際に取り組みながら，授業実践上の見通しを持つようにする。
・1 年でやり遂げなければならないプロジェクト。まずは体育で実践し，このような取り組みを他教科で繋げていく。

【協議内容】

（1）「認識のズレとは？」

鈴木「教師の力量に関するズレ。どういう教師が良いのかといったときに実技能力だけがあればいいのか？育てていきたい教師像のギャップ，ズレ。大学で教わってきたことと現場で求められることのギャップに戸惑う学生が多い。最初から授業の形だけを整えようとする学生。大学教員も現場を見ないで理論を語るのは良くなく，理論の再構築をしていくことが大切。」

（2）「現状の取り組みで 6 時間分の授業を実践したことの，教育実習との違いは？」

鈴木「大学の教員，現場の教員，学生全員で授業づくりを行う。立場を作らずに，平等な立場で。時間を共有して作り上げることでお互いが新たな発見をできる。」

石井「小平の小学校を用意してある。9 学級。体育の教師は初任～6 年目の未熟な教師が多いため，日々悩んでいる。授業に入ってもらえるなら入ってもらって構わない。」

（3）「よりよい授業実践のよりよいとは？」

鈴木「よりよい授業実践の価値観はそれぞれ違うが，実践を通して新たな価値観を共有していく。自

分の価値観を持っているが,『なるほど，こういう世界があったのか』という新たな探求のきっかけができるようになることがこのプロジェクトの目的。」

鈴木「バレーボールのネットが張ってある　→　バレーボールをすることが当たり前という考え方をする子どもたちから，

バレーボールネットが張ってある　→　ネットを使って遊ぶ，バレーみたいな遊びという発想の多様性がある子どもたちが増えてきている。」

上野「生徒に対して威圧するのはよくない。こっちを向いてと言ってこっちを向かなかったら怒るというのは間違い。」

鈴木「このような経験を教員養成課程の時点で学ばせることができれば･･･。」

石井「それを学生に学ばせることは大切だと思う。威圧を与える教師は学級を崩している。」

３．調査研究の目的

本調査研究の目的は，アクションリサーチ的なアプローチによる学生の授業実践体験が，教師としての力量形成に及ぼす影響について調査し，教員養成カリキュラムの改善に資するプログラム開発することである。

★「教育実習，模擬授業と何が違うのかを明確にすることが大切」

現職の教員や大学教員（指導する立場）と実習生（指導を受ける立場）という社会的な関係性を崩しフラットな関係を築くことが前提。お互いが主体的に参加し，問題解決にあたっていけるようなプログラムの仕組みを作り上げることが重要。学生は現職教員や大学教員が発言したことに流されてしまう可能性が高い。学生はどうしても現職教員や大学教員を上に見てしまうので，そこをどう改善するかでこのプロジェクトのオリジナリティが出る。

→　学生たちの変容はよく問われているが，教師たちの変容を見てみたい。」

４．調査研究の具体的な内容・取組方法

①先進的な取り組みの視察

②都内の小中学校を対象とした大学との連携についての調査＜抽出 250 校＞

③プログラム開発に向けた検討

④附属学校での授業実践（小グループへの指導）～10 月中旬

⑤東大和市内での授業実践（小グループへの指導）～11 月中旬

⑥東大和市内での授業実践（一クラスを対象にした指導）～12 月中旬

第２回　運営委員会　（平成 26 年 5 月 7 日）　プロジェクト内容の検討

１．これから研究を進めるにあたって

（１）日本の各大学の教員養成課程システムについて

日本の教員養成課程大学の先進校の取り組みについて視察調査を行う

・佐賀大学は系統的に進められており，教師と学生が共同で授業づくりを考えていくスタイルをとっている。「大学で学んで現場でいきなり実践する」というスタイルではなく，間に挟んで実践を取り組んでいる。

・地方大学は１年生「観察」，２年生「参加」，３年生「実践」，４年生「複免」という式の大学が増えている。3 年間で教員養成は終えることができる。学芸大は珍しい。

・弘前大学は 4 年生になると毎週 1 日現場で実習し，その反省をディスカッションするというカリキュラムが取り込まれている。

・上越教育大学は教育実習を分けている。

→　4 週間中の 1 週間は観察（6 月）。残りの 3 週間は実践（9~10 月）

→　上越の先生は研究者ではないようだと言われている。

・秋田大学は体育の学生が 10 人いて，体育の教員も 7 人。

・東京都内の動き

→　教師養成塾，採用前講座（教採合格後の 9 月～10 月あたりから行う），指導者講習会に新採用者も受ける

（２）先進校の視察の意義

先進校の教育実習などの取り組みについて調査し,アクションリサーチ的な取り組みの参考とすること。

実際の学生の声や教育委員会の声を拾い上げ，プログラムを作り上げる。

文科省から求められているのは，この研究をここだけで終わるのではなく，カリキュラムとして全国に広げていくこと。

総合的な教師力向上といったときに，学生だけが成長するのではなく，教育主事や現場の先生たちも自分たちの成長を感じられるようにすること。「教える」・「教えられる」という立場を崩し，学生・現場の教師・大学教員が一つの共同体として成長することを目的とする。今の教育実習の問題点は，現場の教師が実習を負担や重荷であると感じていることでメリットをあまり感じていないということ。アメリカでは実習生の受け入れを歓迎するのに、日本はなぜなのか・・・？一緒に育てながら一緒に育つ関係性のプログラムの開発を目指したい。

【現職教諭の実習に対する意識について】

・実習生の人数がネックだと感じる。人数が多いから仕事が増えるというわけではなく，人数が多いと実習生とのコミュニケーションも取りづらい。

・実習生だけで 200 人近く受け入れることになる・・・。

・１回の実習だけになるという動きに関して・・・。

→　今までは 9 月の実習では基礎的な教育実習を教え, 4 年の実習で応用できるようにという方針でいたが，１回だけの実習で現場に出ていくとなると，9 月の実習で応用的なことも実習生にさせていかなくてはいけない。

・世田谷区内の中学校では，夏の研修会を教育実習生対象として行っている（数学)。

→　現場の先生，大学の先生，実習生　で取り組んでおり，共に指導案作成などを行っている。学生の温度差は実習経験の差にもよる･･･。

・実習生のクリエイティブな発想があまりなくなってきた。どこからか答えを持ってこようとする傾向。

・教える，教えられるという関係があって，「教える」立場になると自分が成長したと感じている。

（３）先進校の視察について

・6 月の定例会ではどんな視点で視察を行うのかの共有。
・7 月の定例会では，視察をもとに話し合えるようにしていく。
・小学校・中学校関係なく視察してもらう。
・附属の教員と現場の教員のつながりにも着目していきたい。
・実際に参加している学生の声，現場の教員の声を聞きたい

【視察予定校】
佐賀大学（笠松）
上越教育大学（矢島）
弘前大学（上野）

第３回　運営委員会　（平成 26 年 6 月 12 日）　プロジェクト内容の検討

1．公開研究発表会（2 月 10 日）について
文科省は後援という形は取らないという決まりになっているため，後援には入らない。受託している立場の為。
→　主催：東京学芸大学　　共催：東大和　　後援：東京都教育委員会など？

（1）授業実践に関して
・授業の内容はできるだけ体育館でできる内容が無難か・・・。
・何限目に授業を行うのかはこれから検討。
・今関先生（文科省）もコメンテーターとしていらっしゃる。実践に対しての議論の場で色々な意見をいただく。
・2 限目から授業実践を行う予定。
・全体会は 6 限目にきちんと時間を確保して行う。14 時～？　挨拶もここで行う。
・公開授業研究とは違うので，最初の段階でこのプロジェクトの趣旨を伝えるべきではないか。→2 限目で説明する？

授業実践日の予定（仮）
2 限目　　授業実践　or 本プロジェクトの趣旨などの説明をする会？
3 限目　　授業実践
4 限目　　授業実践
5 限目　　授業実践
6 限目　　全体会

2．視察に関して
・先進校への謝礼については，食べ物は不可なので学芸大のグッズ（ボールペン，クリアファイル）などをお渡しする。→　意外と好評

３．夏の教員研修に関して

〇対象（仮）

東大和市内の小中学校の教員　定員：30 名程度（小：25 名，中：5 名？）

学生：20 名程度（小学校教員希望者※学科は問わない）

10 名程度（中学校教員希望者）

（学芸大の 2，3 年生に呼びかけ）

・東大和市内の小・中学校の先生。パワーバランスを配慮して。学生に関しても，体育だけではなく他学科の学生も集める。

・学生を多めにした方がいいのでは？教員が多すぎると学生が萎縮するかもしれない。

・学生の呼びかけに関しては，チラシなどで行う。全体に周知させるためには・・・。

・アクションリサーチを行う上での問題

分離した状態（現職の先生，学生，教授）であるため，学び合える仲間として活動できるように準備しておかなければならない。学生から学んでいくような環境づくり。そのために･･･。

→指導者という言葉はあまり使わない

→どんな人を集めるのかが重要。体育専科ばかりではない方がいいのでは？若手の教員がいいが，初任者だと学生と変わらない。

〇プログラム：6 時間コース（2 日間？）

１）演習 1：授業を経験してみよう

小学校（担当：笠松先生），中学校（担当：上野先生）

２）演習 2：実践交流

３）演習 3：ボールゲームの授業を構想しよう！（指導案の作成）

→複数のグループに分かれて検討

４）演習 4：ワークショップ～ボールゲームの授業を考える～

５）演習 5：模擬授業

→小中各 2 つずつの模擬授業を経験する（30 分ずつ程度）

６）演習 6：振り返り

・構成は同じであるが，子どもたちの意識の流れを重視した授業を行なっている（笠松）

・だいたいはこのプログラムで良いが，講義形式はなしにして，演習メインにする。関わり合っていくなかで学ぶ。２）はボールゲームに関する講義だったが，演習に変更。

〇　研修日の日程

・場所は東大和市

・8 月 5 日，7 日　13 時半～

４．研究に関して

・教員の意識調査をした方がいいのではないか。現場の教員が教育委員会や大学，学生と関わること

に対してどう感じているのか。調査対象の現職職員ではなく，無作為に抽出した現職教員への意識調査。7 月 9 日（もしくはサイボウズ上）に鈴木が提案する。

→　現職教員が大学に期待していることは何なのか？

→　免許更新は当初不評だったが，実際に行ってみると意外と面白いという意見も多い。

→　大学を卒業したら大学との関わりは終わりなのか？大学との現職教員との関わりの重要性。

※質疑・意見

○東京学芸大学を大きな組織として捉えているのか，小さな組織として捉えているのか。東京学芸大学だからこそできるようなアクションリサーチ的なモデルを研究するのか？それを全国に発信していくことが目的なのか？（久保田）

→東京学芸大学の中のモデルとして捉え，それを全国に広げていく。

○ワークショップによる対象者の変容をどのような成果として捉えるのか。言葉が変わってきたのか？考え方？どう見取るのか。（久保田）

→検証していかなければならないので，これから検討する。

第 4 回　運営委員会　（平成 26 年 7 月 9 日）　先進校の視察報告

１．実践報告

【山口大学視察報告（鈴木）】

テーマ：「ちゃぶ台（方式教職研修計画）」

○教育学部棟に入ってすぐちゃぶ台ルームがある。指導書など様々な書籍があり、学生の交流の場。畳張りですごく落ち着く。

○「ちゃぶ台コーホート」の概要

・教職志望学生（養成）・臨時的任用講師（任用）・本務者（研修・採用）

・学生が求めるもの→講義，演習　・現職が求めるもの→体験・省察型研修　ピアサポート

○担当者への聞き取り

・ちゃぶ台では行政研修でやれない/やらないことをやる

・ミドルリーダーを育成する

・懇親会を必ずセットする

→研修会に大学が関わらなければならない！

・学校で経験すれば，教師の力量が形成されるという勘違いがある

○「ちゃぶ台」とは

・そこに参加するものが主体的に参加し，作り出していく。

・理念に基づいてプログラムが構成されなければいけない。

現状→うまくいかないこと，うまくいくことがある。

○参加学生への聞き取り

・参加すると何かが得られる気がする。→先生から何か教えてくれると思っている。

○参加教員への聞き取り

・学生は最先端の情報を持っているから教育実習にたくさん来て欲しい
・チームで悩みを共有することを学び，人に頼ることの重要性を学んだ。
・学生をまとめていけない
・同じ志を持つものどうし
・出会い。部活の後輩のような感じ。
・入ってしまえばいいが，外側からは入りにくい。
→　学生と関わることで刺激になる，モチベーションが高まる
→　原点に振り返ることができる

・現場に出ることへの不安の解消
・現職の先生から何か教えて欲しい
・刺激を受ける場
・講義を受けたい

学生

・アイディアをもらう場としての機能から共に考える場への変化
・学生は未熟であるという認識
・原点に立ち返る場
・ネットワークづくり
・コーホートとともに懇親会を重視

現職

〇まとめ
・多様な他者が交流する場の提供にとどまっている
・主体的に同一の問題解決にあたるところまではいたっていない
・教育委員会の役割はどこにあるのか？

〇質疑
・ちゃぶ台の入り口は？
→　先生の紹介，人づて，ポスターで掲示
・懇親会について
→　先生方のギャップに驚く。懇親会を通して仲良くはなるが、意見をするとなるとできない。先生というイメージが強いから。
・学生が先生の学校に訪れたりすることはあるのか？
→　先生が来てもいいよとおっしゃってくださるが、実際迷惑ではないかと考えてしまう。
・卒業後はどうなるのか？
→　ちゃぶ台に登録している人は、卒業しても色々な情報が届くシステムになっている。卒業後もつながりが途切れない。

【上越教育大学（矢嶋)】

テーマ：「分離方式・初等教育実習」

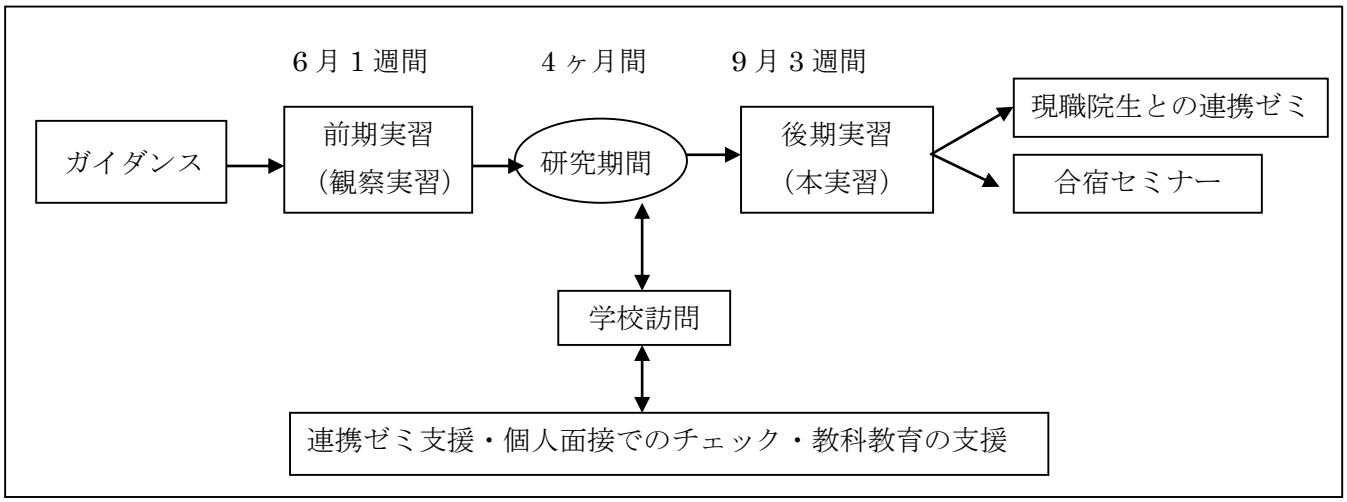
○分離方式の初等教育実習の導入背景

21 世紀の教育は地方分権化が進み、学校は特色ある教育課程の創造が求められ、実践的で、創造的な教師の養成こそが極めて重要と考えている。学生は専門的力量も必要であるが、指導案と小手先の教具があれば授業が成り立つという考えを払拭しなければならない。

教師の永遠の命題･･･　新に子どもが問題意識をもって熱中できる授業の創造

教育実習だからこそ、失敗してもこの命題を大事にしてほしい！

○分離方式の初等教育実習とは？



・研究期間中の支援体制

→最低 2 回以上は学校を訪問して指導を受ける

→所属ゼミの支援　①院生の助言　②授業構想の発表　③マイクロティーチングによる検討

→実務家教員による支援

○分離方式の導入がもたらした効果

（1）フィールドワークや事前観察・実験・製作、教材開発して学習構想する傾向が顕著になってきた。

（2）実習生と指導教諭の双方にゆとりが生まれ、教材研究と実習授業の質を問う評価の目が高まった

（3）学習指導案づくりで終始していた実習が、初等教育を丸ごと体験できる実習へと変貌してきた。

（4）課題が４ヶ月前に提示されることから、大学としての支援体制が芽生え、自ら実習授業を対象とした臨床的な卒業研究が増えてきている。

（5）実習生の授業研究を参観する大学教員が顕著に増加してきた。

○質疑

・上越教育大学と教育委員会の関わりは？

→大学と教育委員会が話し合ってスタンダードをつくっている。ルーブリックまで作成済。
→「こういう教員になってほしい」ということ像をしっかり現場の先生と教育委員会で共有し、持模擬授業などを行なっている。
→教育実践演習を４月に持ってきている。

※視察に関わって入手した資料はサイボウズ上に。

【佐賀大学実践報告（笠松・石井)】
テーマ：「教育実践フィールド演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」
○教育実践フィールド演習Ⅰ
○教育実践フィールド演習Ⅱ･･･グループで授業づくり
○教育実践フィールド演習Ⅲ（大学講義）
実習校事前指導　→　学生から実態報告　→　大学講義（復習）※理論と実践を結ぶ
○教育実践フィールド演習Ⅲ（模擬授業）
・実習校からの課題　・指導案作成　・資料、教具の作成　・模擬授業　・反省
○体育科教育法
・Ⅰ：教室での講義（堤先生）
・Ⅱ：模擬授業
○体育科教育法Ⅱ（模擬授業：対象は他教科学生）
・他教科の学生はこういう風に体育の授業を作っていくということを学ぶ。体育科の学生は教えることで更に学びが深まる。
・他教科３年生を体育科３・４年生が指導する
※　教授は一切口出しなどしない。
・授業づくりのプロセスを学ぶ
・院生がコーディネーター
・資料「小学校体育なるほどハンドブック」・「小学校の体育授業づくり入門」※インターネット不可
○佐賀視察のまとめ
・実践的指導力の育成　コミュニケーション力
体験（模擬授業）　←→　省察（リフレクション）
・現場とのつながり（指導対象が明確）
附属小、市内協力校
・専門性の高まり
・学生主体の授業
他学年や他教科学生との学び合い

佐賀大学は教育学部が一番忙しい･･･。
（学生談）

○佐賀市教育委員会の仕組み
※　別紙詳細
○質疑・意見

・体育科教育法Ⅱについて

→体育科教育法Ⅱでは他教科の学生にとっても、体育科の学生にとっても授業として単位が与えられる。

・フィールド演習Ⅰ・Ⅱは子どもを対象にした授業づくりをしているが、体育科教育法Ⅱは学生相手の授業づくりになるので、抵抗があるのではないか。

→授業のつくり方を学ぶことがねらいなので、対象はあまり意識していないかも。

・現職との関わりは？

→佐賀は大学主体であり、現職の先生方との関わりはほとんど見られない。

・佐賀は独自の学習をしている（これが体育であるという概念）ので、他県での体育指導に抵抗を受けるかもしれない。

・教育委員会と大学の関わりは？

→プログラムの主体者が元教育委員会の指導主事。でも事務的存在。指導するのは大学側。

【弘前大学視察報告（上野）】

テーマ：「Tuesday 実習」

〇弘前大学教育学部の特色

・少人数ならではの一人一人に配慮した細やかなプログラム。しかし大学教員の負担が大きい。

・保健体育科として 20 人入学。　入学後に初等か中等を選択する。

〇Tuesday 実習の位置づけとねらい

1 年次：「教職入門」では、「学習中の教師の役割」について「教わる側から教える側への意識の転換」をねらいとして授業を観察している。

2 年次：「学校生活体験実習」では、「学校行事や生徒会行事等における生徒の様子や教師の役割」等についてもいろいろな生徒の活動場面を通して観察している。

3 年次：学習中における教師の役割を体験的に学ぶという位置づけから「集中実習」と「Tuesday 実習」がある。3 年次の Tuesday 実習（２単位）は、集中実習（2 単位）及び事前事後指導（１単位）と並行して進められる。

【集中実習】

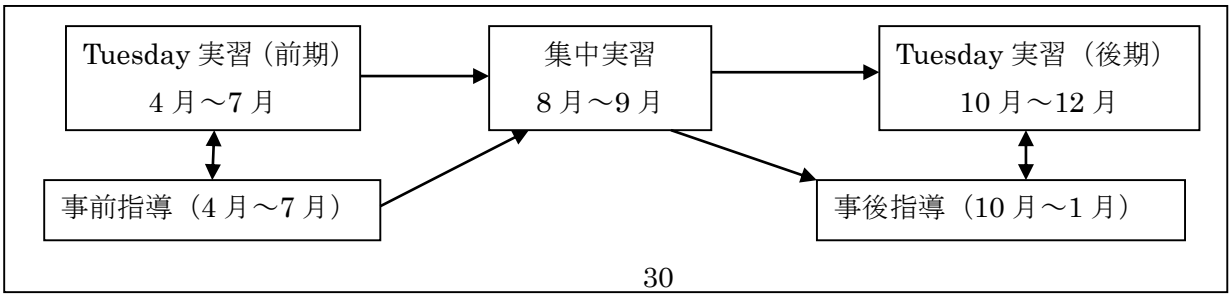
２～３週間というたんきかんで集中的に教育活動を体験することにより、授業を中心としながら教員としての職務全般について理解し実践することをねらいとしている。

【Tuesday 実習】：附属の学校で授業をつくる。授業は学生もしくは大学教員どちらでもよい。

①長期にわたる継続的な観察を通して、児童生徒の学習過程やその変容について理解する。

②集中実習を基礎に設定した課題による授業づくりを通して、教師としての資質・能力をいっそう高める。※　現場の先生との関わりがほとんどないのが特徴。

【3 年次教育実習の全体像】



〇質疑・意見など

・授業の参観で、附属校の先生と大学の先生が関わることはない。お互いに授業観が違うので、そこは触れないようにしている。

・単元計画はどう作っているのか？どんなプロセスで行われているのか疑問。

・Tuesday 実習のなかで現職の先生と学び合う機会はない。

・この取り組みをみてどう感じたか？

→生身生徒を見ながら行うので、学生が勉強になっている。よく意見も出ている。学びが深まっている。しかし、附属の教員との関わりが全くないのは違和感だった。

・Tuesday 実習は、生徒との関わりはあるが、現職の先生との関わりがない。それは実習として成り立つのか？実習の振り返りをするときに、現職の先生が子どもの実態などを説明して授業づくりに役立てるということもあるのに・・・。子どもを借りて事前・事後指導の延長上にあるものという感じ。

３．総括

それぞれの実践報告を受けて、チームの作り方　に課題があると考えられる。

今後は、この点を意識して学芸大学のこの PJ を進めて行く必要がある。

４．最後に・・・。

・研修は、学生が多すぎない方がいい。現職教員がやりづらくなるので、できるだけこじんまりやろう。

・懇親会を開くかもしれない・・・。→　私たちのホーム香港にて

・「授業づくり」という視点を違う立場の人たちの意見を取り入れたい。TV の番組プロデューサーや保護者など。

・東大和の教育って最先端！と世界的に言われるようなプロジェクトに～。

第 5 回　運営委員会　（平成 26 年 9 月 3 日）　公開研究発表会について

【本日決めること】

(1)　プログラムをどうするのか？

(2)　2 月の発表会のプログラムについての確定

→2 点を踏まえた上での事務局のこれからの仕事も絡めながら

１．9 月以降の取り組みについて

（1）先日の研修会の振り返り

・TGfU について

→学生は聞き慣れた感じであったが，教員は少し戸惑いがあるようだった。現職にとっては新しい考え方だったのか？

→学生は大学で理論を学ぶが，現場での応用の仕方を知らない。

一方で，現場は新しい理論を知らないという現状。

【学生】　⇔　【現場】　での食い違い。

→体育の授業は限られた時間の中で指導しなければならないため，成果が見えにくい。その為，現場の先生方に新たな指導法の重要性が伝わりにくいため教え込みが生まれてしまう。

・新しい考え方を取り入れることの重要性

→先日の体育学会では，水泳の授業では水平方向だけを教えるのではなく，垂直方向（浮き沈みなど）を教えることも重要であるという発想を投げかけていた。

→子どもは教えられたことの意味を分かっているのだろうか･･･？　**形だけの学び。**

（ex.数学では sin/cos/tan の意味を知らない子どもが多い。とりあえず公式だけ知っている。）

→体育の学び方を教える為には･･･？

・現場との距離を縮ませるために

→体育学会では，TGfU が取り入れられた授業が増えていると主張されているにも関わらず，現場の先生方は知らない人が多い。

→入試制度との関わりがないため，体育は薄く見られがちである。入試に関わってくるとなったらもっとストイックに学び方を追求される。

→教える側が，教えている内容を子どもたちにどう伝えたいのかということを考えるようにならないと，学び方まで追求しないだろう･･･。

・体育とは何を教える教科なのか？

→体育は教科書がないからこそ指導が難しい。体系化されていない。体育は何を学ぶのかと考えると，色々挙げられるがまとめることができない。豊かな生活を送るため。

→24 時間テレビの 100 キロマラソンを見て人は感動するのか？膝が痛くても怪我をしていても無理して走ることへの疑問を持つことも大切ではないか？

２．本プロジェクトを進めるにあたって

〇アクション・リサーチ的な取り組みの工夫

✻グループ構成の工夫　✻多様性の保障　✻平等性の保障

プログラムとは？

→よりよい授業にしていくことが目的。学生・現職・大学職員のチームを作って現職の授業を学生が観に行ってビデオを撮ったりしてリフレクションする。そこから授業を作っていく。

→授業は教員に作らせるのではなく，学生に作らせるのはどうか。教員は型にとらわれる傾向にあるから。学生が上手く説明できない部分を現職が補って説明できるようなイメージ。

どれくらいの規模で行うのか。

→学生はできるだけ学部生を参加させる。

→学部生は実習期間中と重なっているためスケジュール管理が難しいかもしれない。

→スケジュール管理は学生中心で行うのは難しいかも。現職は 17 時以降しか手が空かない。

中学校だとその後部活もある･･･。

グループ編成について

→学生グループは１チーム院生１名・学部生 2~3 名くらい。リーダーは学生にさせる。

→全部で４チーム

【これからの簡単な流れ】

①全体定例会をする（グループの編成など。スケジュールを決める。）in 東大和第三小。
　9 月末日。

②東大和第三小の授業を観に行く。（実態把握。観察の仕方を矢嶋先生がレクチャー）

③それをもととして，グループで授業を提案。

④（模擬授業を行う？）

⑤東大和第三小に提案

⑥実践

○定例会による情報交流と研修

10 月：社長の講演

11 月：テレビ局プロデューサーの基調講演に基づいて授業づくりについて話し合う

12 月：保護者との座談会（東大和市内とは無関係の保護者を招待して）

1 月：演劇的手法を活用したコミュニケーション能力の向上

2 月：実技講習会

3 月：実技講習会

【決定事項】

定例会は，10 月以降は　**第 2 金曜日**　に行う。

・9 月 16 日（火）　東大和市立第三小　18：00～

・10 月 10 日（金）　18：00～

・11 月 14 日（金）　18：00～

・12 月 12 日（金）　18：00～

○附属小学校での取り組み

＊模擬授業演習を附属学校で行う。　→新プログラム

＊ここで模擬授業を実践してきた学生に 2 月の発表会で授業させたい。

３．2 月の研究発表会のプログラムについて　　※※※詳細は別紙※※※

○当日の次第

２限目　　本プロジェクトの趣旨説明及び取り組みの振り返り

３限目　　授業実践①　グループ 1

４限目　　授業実践②　グループ 2

昼休み　　模擬研修会
５限目　　授業実践③　グループ３
６限目　　全体会
７限目　　パネルディスカッション　　17：00くらいまで？
パネルディスカッション終了後　懇親会

【変更点】
・パネラー　土田了輔先生　→　矢嶋先生　or　学芸大学の先生？
・パネルディスカッションまでやると時間が遅くなる？？
・コーディネーターは鈴木直樹先生。

〇当日の規模
・参加者は100～200人くらい集めたい（申し込み先着順）
・お昼ご飯は注文で。

第１回　全体会　（平成26年9月16日）　プロジェクトの趣旨説明等

１．挨拶
（１）市教育委員会　石井氏及び東京学芸大　体育科教育　鈴木直樹から
今回のプロジェクトは、文部科学省、東京都教育委員会、東大和市教育委員会、東京学芸大学との協働研究であり、自ら学び続ける教師や他者と共に力をつけていく教師を育成することを目的として始まった。つまり、多様な立場の人間（現場の教員、教師志望の学生、大学）が関わり合い、様々な角度から教育していくことで、教師の力量形成を促すことが目的である。
こうした初の試みを行っていくために、ぜひ様々な立場の人間が自由に意見を言い、積極的に変わっていくことを恐れず、多くの可能性があることを示唆できれば幸いである。

（２）本日出席をしているメンバーの紹介
東京学芸大学　２年生　野々村あゆみ（国語）
専属事務　島貫由紀子
東大和第９小学校　越智
東京学芸大学研究生　中村有希
東京学芸大学４年　藤澤潤
都立永山高校　阿部隆之
東大和第８小学校６年　重田
東大和第６小学校４年　松枝博敏

東大和第１０小学校６年　鈴木
東大和第４小学校４年　峰岡
東大和第４小学校５年　佐藤
東大和第１小学校　中井川
立川国際中等教育学校　横山彩
東大和第３小学校　特別支援　鬼沢
東大和第３小学校４年　柄澤
東大和第１中学校１年　坂本
東大和市教育委員会　小野

２．本日の課題
これからの計画を立てること。

３．プロジェクトの柱
●２月１０日の研究発表のため、ともに授業をつくる
現場、大学生、大学院生、行政とのコラボ「体育の授業改善の取り組み」
チーム内で授業をつくるためのチームの特色を確立する。
「今年は小学校（１・２・５年生）の先生が発表をする」
・必ず定例会をする。
・現場と関係のないと思われる立場の人たちから講演をいただき、教育を考え直す。
10 月：「会社経営から学ぶ」地頭薗哲朗
11 月：「テレビ番組づくりから学ぶ！！」菅間和彦
12 月：「スポーツコーチングから学ぶ！！」菊原伸郎
１月：保護者から

●アクションリサーチ的な取り組み
授業を改善していく中で、授業者とリサーチ側が同じチームを組み改善を実践していく。

●グループ分け
・院生や現職教員が必ず１人以上はグループにいるようにする。
・男女、または取り組みの分野などを考慮して院生、学部生については分けている。
・現職の教員については、発表を考えて分ける。
・学部生がグループリーダーを担当する。（学部生が自分から関わるように）

●授業改善プロセス

授業改善をするために、授業担当者が学級担任が授業をやるだけではなく、学部生や院生がやってもよい。授業改善のためのものであること（授業にどうかかわっているか。）が大事である。学部生にとって力が付く、現場の先生の力量形成、教員養成のための新たな場面など。

学部生と現場とのつながりを通して、現場の教員にも新しい力量形成ができると考えている。

第２回　全体会　（平成 26 年 10 月 10 日）　～会社経営から学ぶ～

１．各グループの進度の状況

１グループ…ipad の活用など行う予定だが、グループ内でのレスポンスがない。

２グループ…9 月末に１度集まったが，学生の参加が少なく，意見を共有できていない。

３グループ…まだ顔合わせができていない。

各グループ 10 月末までに 2 月の発表会で行う授業の単元を提出する

２．研究発表会について

発表会では、授業をすることよりも，これまでどのように取り組んできたのかということが重要なので、ショートムービーなどを作成し発表会当日１グループ 5 分程度発表してもらう。

〇どんなショートムービーにするのか？

・グループの経過が分かるように。

・記録を意識してこれから活動に取り組んでいく。

３．地頭薗　哲郎さんの講演会

※まずリラックスするために簡単な体操

〇　生きる上で重要なこと**運動・食事・睡眠**

この 3 つは自然の摂理であるが、現在の子どもはその当たり前のことができていない。

そこで地頭薗さんは運動に着目し、プロ野球リーグを設立する。

高校生までは，精一杯スポーツをさせてもらえるが高校を過ぎるとコロっと変わって勉強に切り替わってスポーツをしなくなる。夢が途絶えてしまう。そこでプロ野球リーグを地方に設立することを考えた。アメリカはプロ野球リーグが 270 くらいある。日本は極端に少ないので，夢を諦める子どもが多いのではないか？

〇　地方を活性化させるために

地方で野球リーグを立ち上げた意図は，子どもの人材育成である。地元の野球リーグで地元の人に支えられながら夢を追いかける環境ができれば、子どもたちがいざ引退して仕事を始めようとするとき

に地元に恩返しをしたいという気持ちが自然と湧き出るはずである。地方に野球リーグを設立することは地方の子どもの人材育成である。

○　ハウステンボスの変革

・ハウステンボスは街であって街でない。欧州にこだわりすぎているのではないか。

・アドベンチャーパークエリアを制作

→子どもが主役で、両親などがいなくても安心して遊べるような場所。

→子どもにいろいろな体験をさせるきっかけを与えれば，子どもはどんどん成長することを地頭薗さん自身が学んだ。

→子どもは無限の可能性を秘めているので最初から大人が決めつけてはいけない。子どもがのびのびできるような環境を教員が作ってあげることで，子どもはどんどん成長するのではないか。

○　子どもに過保護すぎるのではないか

・最近の教育は過保護すぎるため，子どもたちは自分たちで気づくことができていないのではないだろうか。例えば，朝の交通安全で子どもたちは大人に指示されるままに横断歩道を渡っていて，車が見えていなのではないか。本当に大切なのは子どもに危険を認知させ，気づかせてあげることではないか。

○　食の乱れについて

・科学は発達しているはずなのに，子どもの体力減少や病気が見られる

→その原因は野菜の栄養価は昔の 12 分の 1 という現状。→　免疫が落ちている

【地頭薗さんの理念】

これからも子どもが好きなこと・楽しいと感じることを伸び伸びとできるような環境をこれからも作っていくこと。

【質疑応答】

①子どもにあえて枠を作り，その中で伸び伸びさせるということではダメなのか。

地頭薗「そこは難しいが，自分の理念としては子どもに好きにさせること。嫌なことを無理にさせるよりも楽しませたい。その代わり子どもをしっかり見ておくこと。楽しいことを伸び伸びたくさんやらせて経験させることで多様な子どもたちが生まれるのではないか。本当に大切なことは勉強ができることではなく，現状を見抜いて解決していこうとする力ではないのか。」

②「スタッフさんがどんどん活力・やる気をなくした時どうやってモチベーションを回復させたのか。」

地頭薗「まずは社員・スタッフなどの仲間と目線を合わせること。お互いの立場に関係なく意見を共有できること。そして，まず自分たちの活動場所を徹底して綺麗にすることを意識している。学校という枠に囚われずに教育が進めることはできないだろうか。現在の学校現場は大変なことがたくさんあるが，

子どもも教師も伸び伸びできる環境になればまた変わってくるのかもしれない。あとは上の人が現場をよく見て回ること。お客さんの声もしっかり聞くこと。」

第３回　全体会　（平成 26 年 11 月 14 日）　～テレビ番組作りから学ぶ～

１．これからのプロジェクトの進め方・連絡

・2 月 10 日の発表会での授業者については，学部生・現職教員・PJ メンバーの多様な授業者であるようにしてほしい。本研究は，学部生・現職教員・PJ メンバーが同じ立場で学び合うというアクションリサーチ的研究であるため，学部生だけが授業実践者となるとプロジェクトの趣旨とは少しズレが生じるため。

・2 月 10 日の発表会に向けて広告を作成中
　→授業者と単元名など記載する予定

・各グループの取り組みに関するビデオについては，各グループで作成して最終的にはそれを編集して１つにする。

２．講演　（テレビ朝日『ナニコレ珍百景』プロデューサー　菅間さん）

番組のコンセプト：ばかばかしいものをどれだけ仰々しく伝えていけるのか。

〇学校・校舎など環境の珍百景

・「まぎらわしい小学校」（岐阜県）･･･学校名が「大中小学校」。

・「大物が来る小学校」（鹿児島県）･･･クジラが見える。

・「エコな中学校」（新潟県）･･･冬の雪を夏に「雪冷房」として活用。

・「手作りプール」（岩手県）･･･トラックの荷台をプールとして活用。

〇授業と行事の珍百景

・「珍しい授業の中学校」（宮崎県）･･･5 月中旬～7 月まで体育はサーフィン！！！！

・「ナニコレ！？な授業」（埼玉県）･･･総合的な学習時間に地元の珍百景を探してまとめる。

・「体育祭で感動の組体操」（埼玉県）･･･男子組体操「壁」。470 名が壁を作って 30M 歩く。

・「師弟関係で教える授業」（大分県）･･･6 年生が師匠となって下の学年に棒術を教える。

〇先生の珍百景

・「自慢の校長先生」（宮崎県）･･･全校朝会で手品を披露。小学 1 年生～6 年生までの多様な発達段階の子どもに話を聞かせるため思いついた。

・「挨拶の短い校長先生」（愛知県）･･･全校朝会での挨拶が 10 秒で終了。

・「集会で限界に挑戦する校長先生」（秋田県）･･･努力する大切さを伝えるため自らが数々の技を披露。体操競技，吹き矢など。

【皆様の身近な珍百景】

・学校の近くに雑木林があって，生活や総合の時間によく学習として活用していた。

・熊本県の水道水は地下水

・スキーの授業など
・地産地消で給食が特徴的
・けん玉を全員が買ってけん玉大会
・図工室にドラム一式を置いて子どもとバンドを組む
・車にスピーカーを積んで子どもの無灯火などを注意する

〇質疑応答
・プロデューサーとはどんな仕事なのか？
→ディレクターは現場の責任者，プロデューサーは番組の責任者。演出は番組の面白さ。
　２週間に１回東京で収録・編集。毎日毎日取材の日々。
・学校教育に対してどう思うのか
→取材を進めて行く上で学校に不満を持ったりすることもある。テレビの仕事はクリエイティブと言われているが，最もクリエイティブな仕事は教師という職業なのではないか。子どものことを考えて関わっていくということは最もクリエイティブ。
・おもしろさなど演出するために心がけていることは？
→取材させて頂いている方々に食べさせてもらっている。この人たちがいなかったら自分は家族を養うことができない。という心がけをいつも持っている。

第 4 回　全体会　（平成 26 年 12 月 12 日）　～スポーツコーチングから学ぶ～

※これから研究発表する内容の為，記録は控えさせて頂きました。

第 5 回　全体会　（平成 27 年 1 月 9 日）　～保護者から学ぶ～

１．島田恵利さんの講演
　〇保護者の視点から、思うこと。

　子どもと接することの、親からの立場
　PTA の立場
　それぞれの役割で子どもに接する→役割を演ずること

　・モンスターペアレントという言葉が発生したのはなぜか。
　　それは、親としての立場から、学校に投げられた疑問ではないか？
　　クレーマーとは違う

　・子どもが一番長い時間を過ごすのは学校である
　・生活習慣は家庭で、教育は学校で、と考えるのは違うのではないか
　・子どもは先生を見て育つ

・ルール、マナー、を学校という小さな社会の中で得ることしかできない
　が・・・学校にそこまで求めるのはどうなのか

○地域教育
地域の人は子どもに何を教えられるのか？
社会のしくみの中でそれぞれがそれぞれの役割を演じて接する、ということを示す
今は叱る大人がいない→　叱らないのではなく、叱る大人がいない
そういう環境で子どもが育つことが問題
「PTC（コミュニティ）A」という形で動き出している
○地域教育とは？
教育されるのは親の方なのでは。
教育観を共有する場がないのが問題

○地域をどうつなぐか？常に疑問に思っている

【質疑応答】
PTA→PTCA
○どういうふうに結び付けていくのか、具体的に教えてください。
学校評議委員会（地域の方も参加する学校を評価する委員会）と PTA を結びつける。

○PTA とは親と教師だが、先生が抜けている気がする　親から見て先生とは。壁がある気がする
・PTA からみた教師は、行事などに協力していただく存在
・地域性があり、それが変わらないから壁があるのではないか。

○学校は変わりにくい→地域が変わらない
コミュニティを巻き込んでいく組織づくりが問われていくのでは

２．2/10 に向けて、
・取組の様子の成果報告を 10 分程度でビデオなどで作成
　グループの変容が伝わるように
・当日配布する資料に入れる各グループの指導案を１月末までに送っていただく

パネルディスカッションには PJ メンバー全員参加してほしい

ランチョンセミナーのための部屋を３部屋用意していただきたい→確認

指導案の形式はフォーマットがあった方がいいのでは？
　統一するのは難しいので、それぞれの研究に合った形で

★確認事項

※ビデオの時間、確認してあとでメール　5分？10分？

※石井先生と相談　2/10 先生方の参加は出張扱いになるのか。

第6回　実技講習会　（平成27年2月27日）～土田先生から学ぶゴール型～

土田了輔先生の実技講習会

ゲーム中心の指導・講義

・自己紹介（全員） ・準備運動 ・参加者を４つのグループに分ける（６～７名で１チーム）

１．バスケットボールの専門用語は使わずに、軽くゲームを行う（６分間）

気付いたこと

・人数が多い（味方も敵も多くてゴチャゴチャしている）から、交通整理しなくてはいけない

・ボールを持たないときの動きに注意する

ゴール型のゲームは、前へ、ボール移動すること

早く、まっすぐにボールをゴールへ運ぶこと

２．チームを５名に減らし、シュートを打つことを心がけてゲームを行う

ゲームに入らないメンバーはシュートマップをつける

ゲーム後、シュートマップを見ながら作戦タイム

３．５名のチームで再度ゲームを行う

４．土田先生の指導

・落下地点の法則

・方向ではなく距離

・ボールは最初にシュートを打った地点より、ゴールの近くに落下する

５．５名のチームで再度ゲームを行う

６．土田先生の指導

・ボールを触っていない人→ボールの動きを理解して動くことが大事

ボールが来なければ移動する（専業ではなく兼業、ということ）

「動ける」と「理解する」は、イコールではない

ボールの動きを理解して移動できるようになる

第４節　アクションリサーチグループのあゆみ

－授業づくりの足跡－　　小学校②グループ

第１回　授業検討会

期　日：平成 26 年 9 月 26 日（土）17：00～

場　所：東京学芸大学

参加者：石井卓之・鬼澤亮太・鈴木進也・**松枝秀甫**・真野妙子・中村有希（敬称略）

記録者：中村

（１）よりよい体育の授業について

〇学習課題（めあて）が達成され，学習成果が上がっている授業

〇学習集団（学習規律）がしっかりなされ，教材や教具運動の場の工夫がされ，学習計画がしっかりできていることが重要である。

〇授業の内容的な条件（目標，内容，教材，方法），授業の基礎的条件（学習規律，学ぶ意欲），学習の雰囲気，肯定的な人間関係がしっかりできていること。

〇学習目標が明確であること

〇教材が工夫されていること

〇学習スタイルが運動，子どもにあっている。

〇教師の指導性が発揮されている。

⇩ 対象が小学校１年生ということを踏まえて･･･。

★　動きの中で身体を動かすことの楽しさを学ぶことができる。

→あまり工夫しすぎるのではなくシンプルに。動きの中で楽しさを感じることができる。友達と動くことが楽しい。ただ走ることが楽しい。成功体験など。1 年生なので動くことを重視。

★　動きの中で児童に気づかせたいこと（思考・判断）を明確にする。

→ただ動いて楽しいで終わるのではなく，思考・判断も配慮した学びのある体育にする。

（２）どのように授業の高まりを見ていくのか（今現在出ている意見）

〇万歩計の使用

→子ども全員に万歩計をつけて，歩数の変化を見る。

〇指導案

→指導案の内容がどのように変化していくのか

〇ビデオ撮影

→授業中の子どもの表情・雰囲気など

（３）これからどのように進めて行くのか

〇学部生・院生・現職教員の関係性について

　このプロジェクトは，あくまで学部生・院生・現職教員が学び合うということがテーマ。

現職教員が色々な指導をして授業を作るだけなら教育実習と同じになってしまう。**学部生の発信**が重要。

学部生・院生の良いところは，大学で教育に関する知識や理論を学んでいること。現場を知らないからこそ，柔軟な発想で考えることができること。

現職教員の良いところは，現場の状況・子どもの実態を誰よりも分かること。

お互いに良いところ・知っていることをどんどん出し合い共有し学び合いながら授業を作り上げましょう！

〇授業を作り上げるにあたって

・授業者は２回の授業とも同じ人が良い

・指導案は全員の考えが共有されたものであること

　→授業者だけで作るのではなく，全員で作り上げる。

　そのため，指導案などの作成は全員が集まっている全体の場で行う。

・第三小へ積極的に足を運んでクラスに慣れる（子どもの実態をグループ全員が把握できるように）

→積極的に第三小へ行って，クラスの雰囲気や子どもの実態を把握しに行くこと。第三小は連絡さえしてもらえれば，いつでも何度でも来校して OK。

【第２回定例会（１０月１０日）までの宿題】

①　スケジュールをしっかり明確にして，当日スケジュール合わせができるようにしておく。

→おそらくグループの話合いは月１程度で金曜日の夜か土曜の午後になる・・・。

②　第１回授業の「鬼遊び」について資料収集

③　学部生・院生は「自分はこんなことをやりたい」「こんな理論などもあります」など些細なことでも良いので自分のやりたいこと・知っていることをどんどん持ってくる。

第２回　授業検討会

期　日：平成 26 年 11 月 3 日（月）　14：00～
場　所：東京学芸大学　8 号館　3F プール側ゼミ室
参加者：鈴木・真野・藤澤・戸川・中村（敬称略）

記録者：中村・藤澤

１．鬼遊びに関する資料収集・考えについて

【藤澤】
　ストーリー性のある鬼遊びの提案
（ex.海賊船の中にいるイメージから宝探しをする　等）
【中村】
　子どもの活動量からみた各種伝承遊びの特性
　→鬼遊びの中でも、ライン鬼は最も活動量を確保できる鬼遊びである。
【戸川】
　自分が経験してきた鬼遊びについて（ろうそく鬼　等）

２．体育授業における②グループの方針（仮）

動きの中で身体を動かすことの楽しさを学ぶことができる体育授業

・本グループの体育授業づくりにおける柱
・動きの中で児童に気づかせたいこと（思考・判断）については，本テーマを追求していく中で，子どもたちの中から自然と生まれてくるものであるため，１つにまとめた。

３．　鬼遊びの授業について話し合った事

・目標：低学年の発達段階を踏まえて…
　■楽しい⇒もっとやりたい・もっと楽しいが増えるような授業。
　■鬼遊びの特性を踏まえる。：児童から見た鬼遊びのおもしろさを考えて，そこに焦点を合わせる。
　■１年生の段階での思考・判断をみとるのは難しいか。
　■思考判断も含めて，楽しさに入れる。
・系統性を意識した教材づくり…鬼遊び⇒ボールゲーム（ボール運動）へとつながるようなもの＝動き方，考え方（戦術）
・子どもたちが，「考えながら夢中になって動く」ということができればすごくいい授業。
・物語，ストーリーを作る。⇒遊びから発展した活動へ。個の遊びではなく，集団（クラス・チーム）としての活動へ。
・鬼遊び
→集団的作戦にもってくることができればわかりやすい。
→しっぽなどの具体物があればわかりやすい。

①　教材について

・宝取り鬼

→攻撃が終了する(タッチされる)ときの判断を子どもたちにとってわかりやすいものに。

　＝ハチマキ，しっぽ，タグなど。

→子どもが飽和状態になったときの工夫（ゲームの様相をどれくらい変えられるのか）

→宝取り鬼を工夫する。

→ストーリーを作る

→４対４ないしは５対５（２５人・４チームないしは５チーム）

→文科省資料を参考に。コートの形，ベースはこれで行くか。

→コートの幅を大事に。

②　指導案について

・単元計画（5～6 時間）を決める。

１時間目：オリエンテーション

２時間目：やってみる

３時間目：やってみる

４時間目：もっと面白く（本格的な）

５時間目：もっと面白く（本格的な）

・アンケートを取る（授業の前と後）

・学習カード

③子どもの実態

・発想豊かな子どもが多い

・発言が多く活発的なクラス

・1 学期に少し鬼遊びの授業を受けている（2 時間程度）

・子どもの集団的な学びはできるようになってきている。（1 学期は集団マットを行った）

④その他

・鬼遊びは 11 月下旬～12 月中旬　の間に行う

・今回の授業者は真野先生。学部生は単元を通してしっかり子どもの実態を捉えること。

４．これからの見通し

・11 月 9 日（日）　15：00～　東京学芸大学　8 号館　3F　プール側ゼミ室

→　学部生で単元計画を考えてくる。どんなゲームにするのか考えをまとめる。

→　学部・院生の大学の時間割を作って，第三小に行ける日を決める。

→　次回は指導案を書き始める。

・11 月 14 日（金）　18：00～　　全体会　　東大和第三小学校

第３回　授業検討会

期　日：平成 26 年 11 月 9 日（日）　15：00～
場　所：東京学芸大学　体育棟 3F　プール側ゼミ室
参加者：石井・鈴木・真野・松枝・藤澤・久保・中村（敬称略）

記録者：中村

１．前回の振り返り　※詳細は前回の議事録をご欄ください
・研究主題「動きの中で楽しさの感じることのできる体育授業」
・個で考える→集団で考える（児童間での関わり合い）

２．メンバーそれぞれの今週の課題
①　１年１組子どものアンケート（25 人）【真野先生】
・体育は好きかどうか：好き 25 人
・鬼遊びは好きですか：好き 21 人　嫌い 4 人
・鬼遊びの好きなところ：逃げること・走ること（全員）
　　嫌いなところ：追いかけること（多数）
・鬼遊びが楽しいとき：鬼から逃げ切れた時
・鬼遊びが楽しくないとき：友達から悪口など言われたとき（19 人／25 人）

②　ゲームの様相について考える【学部生】
・単元序盤　鬼ゾーン１個（1 時間目）
・単元中盤　鬼ゾーン２個（2～3 時間目）
・単元終盤　鬼ゾーン２個　＋　鬼の渡り廊下（4～5 時間目）
【皆様の意見】
・1 年生は飽きっぽいから毎時間様相を変える
・ゲームを変化させすぎて子どもがルールがわからないと楽しくないので，ルールが生きたまま様相だけを変える。
・“しっぽ”というワードはダメ。人権上の問題。
・スタートラインを作る
・はちまち自体を宝にするのはどうか？
・コートの大きさ
・安全地帯から出られなくなる子どもが出てくるとおもしろくない
・1 セット：4 分－2 分－4 分
・子どもが楽しいだけでなく，教師側は何を意図しているのか。
→教師が子どもに考えさせたいことをもっと具体的に考えないとやるだけの授業になる恐れがある。
（ルールの工夫，場の工夫，人数の工夫）
・全員が「できた！」という達成感を味あわさせるためには･･･？
→例えば全員 GOAL できたらボーナスポイントを作ったりして，全員がゴールできるような環境・

ルールを工夫し,「仲間を GOAL させるためにはどうしたらいいのか？」と考えさせるようにする。
・子どもたちに試行錯誤させる。思考判断。
・活動後の振り返りでは，どこに重きを置くのか。
→1 年生は思考判断より態度面を重視してみよう。
・チーム作りはどうするのか
→1 年生はコミュニケーションが大事なので，運動能力よりも関係重視。
→授業の様子を見てチームを途中で変えるのも OK。
・楽しめない子への手立て

⇨ 学生で実際にこのゲームを実践してみる！

③　指導案の検討
〇成家さんの意見から･･･。
→「この授業をした結果，子どもたちが〇〇ということを学んだ。」という成果がなければ，ただ楽しかった授業になってしまう。
・子どもたちの実践を通して子どもたちがルールを工夫・改善していくこと。
・子どもに気づかせたいこと・願う姿などを決めておく。

【本日の話合いで決まったこと】
・単元計画（ゲームの様相）の決定
単元序盤（1 時間目）･･･鬼ゾーン 1 個
単元中盤（2･3 時間目）･･･鬼ゾーン 2 個
単元終盤（4･5 時間目）･･･鬼ゾーン 2 個+鬼の渡り廊下
・12 月 16 日（火）5 時間目（13：35～14：20）　に授業を実施！！

３．今後やること（次回までの宿題）
・学部生は単元計画・ゲームをまとめて 14 日に持ってくる。
・本授業の学習成果とは何なのかを決める。
・全員が得点をとれるためにはどうしたらいいのか？

４．今後の②グループの日程

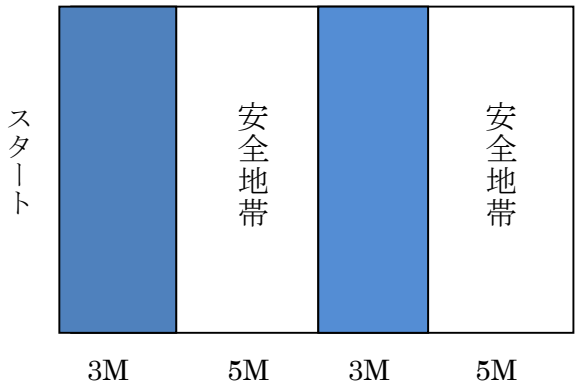
・11 月 14 日（金）	全体会	18：00～	東大和第三小
・12 月 6 日（土）	②グループ	15：00～	学芸大学
・12 月 14 日（日）	②グループ	10：00～	学芸大学
・12 月 16 日（火）	授業実践	13：45～	東大和第三小
・12 月 26 日（金）	②グループ	18：30～	学芸大学

鬼遊び　学生チーム実践報告書

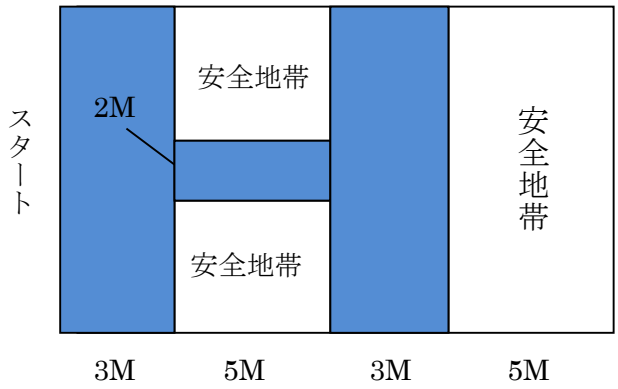
実践日：平成 26 年 11 月 28 日（金）
場所　：東京学芸大学　プレイパーク
対象者：東京学芸大学　2 年生～4 年生

○　実際

ゲーム様相②　　1 ゲーム×2 分



ゲーム様相③　1 ゲーム×1 分
ジョーカー 1 人が渡り廊下を使える。



○　実践者の声

・様相②と③の違いがよく分からない。どちらもあまり変わらない。（全員一致）
　→②と③は前衛・後衛の守りの人数のバランスが変わっただけ。
・タグが掴みにくい。
・タグを取るのが難しい。タッチがいい。
・安全地帯にいる時間に制限をかけるのはどうか。ずっとそこに滞在されてしまう。
・攻撃が圧倒的に有利なゲームな感じがする。
・様相②も③もどちらも面白い。楽しい。

○　客観的に見て

・鬼が不利。②③どちらも鬼があまり機能していない。タグをとることができていない。
・逃げる側の活動量は多いが，鬼の活動量は横の動きに限定されている。
・コートの大きさの修正が必要？
・様相③においては，ジョーカーが常に後衛におり，前２後４　という守りの形になっていた。

第 4 回　授業検討会

期　日：平成 26 年　12 月 6 日（土）15:00～
場　所：東京学芸大学　体育棟　3F　プール側ゼミ室
参加者：石井先生，鬼澤先生，真野先生，松枝先生，藤澤，中村

記録者：中村

１．授業実践（単元１時間目）のビデオを見ての意見

・コートの横はもう少し広めにした方がいい　→　サイドステップが多い
（1 時間目は室内で行ったためコートが狭かった）
・紐の長さを統一しよう
・結果発表で球を数えるのはどうするか？？
　→得点版にする？
・攻めが１人抜けてしまえば守りが崩れる
・宝を入れる仕組みが簡易的なので、攻めの戻りが速い。
・点数が目に見えるものでないため、モチベーションに繋がらない。
・得点が入りすぎなので、工夫しなければいけない
・サイドラインを超えたときはどうするのか。
・「はさみ打ち」の作戦で悲しい思いをしたという児童がいたが、それは作戦なので OK。
・子ども同士でぶつかる場面が危険
・子どもは視野が狭いため，今目の前の敵に夢中になる
・スタートラインはあまり活かせていない。

【観察者から】
・1 時間目でかなり活発的に楽しく活動できていた。
・1 曲の中で　準備時間 - 活動時間 - 準備時間　の流れを作る。
・ゲームの中で良い動きをした子どもを賞賛する。
・今は知る段階なので，飽和状態を作るまでは思考判断は要らないのではないか。

【授業者から】
・まずは、子どもたちが非常に楽しく満足していて，「次いつ鬼遊びする？」という声が次々に聞こえてきて良かった。
・本時のゲームで攻めが圧倒的に有利であったため，様相②のゲームではもっと守りが厳しくなるのではないだろうか。
・活動に満足しすぎてみんなでルールを作っていくという思考判断面で子どもから意見が出なかった。そのため選択性にして，その中からゲームを選んでいく形がいいのか？
・子どもがかなりきつそうだったので，もう少しゲーム時間を短くした方がいいのか。
・コートをもう少し狭めてもいいかもしれない・・・？
・ルールの工夫は子どもの飽和状態が起きたときに行う。子どもに必要性がないのに教師がルールを与えても子どもは必要性を感じていない。
・苦手な子どもたちも楽しかったと満足していた。

・「レベル１」というストーリー性にかなり食いついていた。
・攻めで得点できていないという子は一人もいなかった。
・リーダーをやりたいという子どももいた。→なぜ？
・友だちの良いところを探せた　→　ジグザグ作戦など

２．これからの本単元の検討

・1 時間目は知る段階なので，思考判断は子どもがゲームを知ってきてからでいい。ルールの工夫は子どもの飽和状態が起きたときに行う。子どもに必要性がないのに教師がルールを与えても子どもは必要性を感じていない。
・観察者は，授業後など子どもに感想を聞いてみる。（子どもの特性をしっかり捉える）
・小学校１年生は思考判断がとても難しいので，もし気づきを促すならゲームのビデオを見せる。
・得点が入りすぎ。その対応案・・・
　→教師が守りにヒントを与えて守りの技能を高めさせる。
　→リボンを１本にして１点にする
・得点を視覚的にするために
　→得点版にする？準備もしやすくなる。
・発問に工夫を入れる。「これは OK？」→「なんで？」まで考えさせる。
・ルールは工夫しすぎると子どもは分からなくなる。
・思考判断は攻めにあるので，守り（鬼）に教師がヒントを与える。子どもは攻め守り両方同時に考えることはできない。
・ゲーム中心で，授業の終末で良い動き紹介をする。
・ストーリーの中でルールを工夫する。→サイドラインを超えたら穴に落ちる。
・友だちの良いところ探し→技能・思考判断・情意などミックスしていて OK。

３．決定事項

・ルールは子どもの様相を見て必要性に応じて変えていく。
・様相①コートは横 12M×縦 5M（鬼ゾーン）
・得点については得点版を使う。
・単元 2 時間目は様相①で継続。様相②は単元３時間目からの予定。
・スタート地点に戻るときの戻り方をきちんと固定しておく。
　→コーンなどで視覚的に工夫。ケンステップを使う。
・1 ゲーム　前半（3 分 30 秒）―　移動（1 分）―　後半（3 分 30 秒）♪音楽を通して

第５回　授業検討会

期　日：平成 26 年 12 月 14 日（日）14：30～
場　所：東大和第三小学校
参加者：石井先生・真野先生・鈴木先生・松枝先生・中村

記録者：中村

１．体つくり運動に向けて

（１）子どもの実態

・１学期に４時間ほど体つくりの授業を経験している。
→ボール運び競争・動物歩きなど
・動き作りが好き。
・動いている中でストップするという動作が苦手。
・全体よりグループでの活動が好き→発言しやすいから。

（２）授業の内容

○体育館に入った瞬間「ランド」になっているような楽しい場所。

【授業の流れ】

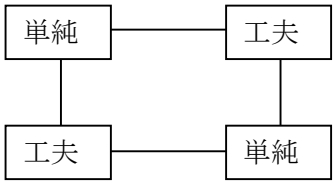
・ならし
・個人→集団（個人で楽しむ→集団で楽しむ）
・ローテーション（レパートリーを増やす）
・動きを考える，紹介（グループ）
　→3.フラフープ／4.5 ボール／6.まとめ

【動きづくりについて】

工夫のある動き（２つ）	単純な動き（２つ）
①ボールを使った動き ②フラフープ ③とびおりる	①力試し ②とぶ・はねる
【工夫の視点】 人数・回数・方向	体一つでできる動き

【ローテーションについて】

・１グループ：6～7 人
・3～4 分で回していく。
・各地点に動きの**カード**を置いておく。
→カードを引いて自分でやる。



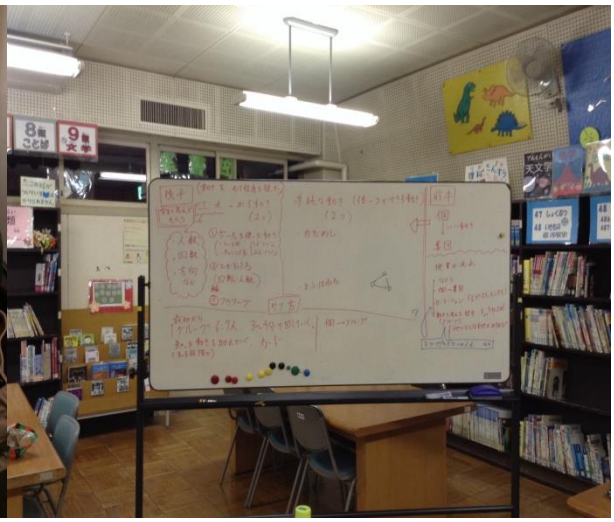
○ボールを使った動き・・・スキルが求められる
　→１～２人でできるようなもの
　→チャレンジ系（回数を決めるのではなく，何回できるかやってみよう）
○フラフープ
　→場所のことも考える
　→回す・投げる・転がす等･･･

⇩

学生は，
ボールを使った動き
フラフープを使った動き
を考えてくる。

２．今後について

体つくりの授業実践は，1 月 19 日～　or　1 月 26 日～　から開始。



第６回　授業検討会

期　日：2014 年 12 月 26 日（金）
場　所：東京学芸大学　3F　プール側ゼミ室
参加者：石井・鈴木・真野・鬼澤・成家・柄澤・藤澤・久保・中村

記録者：中村

【前半の議論】
前回の話し合いをもとに，学生が考えてきた動き遊びの検討。
また，体つくりの具体的な授業内容について検討を行った。

１．動き遊びについてボール・フラフープを使っての動きの提案（学生・鈴木先生から）

（１）ボールを使った動き遊び

・ボール上げ　・キャッチボール　・ドリブル
・転がして止める　・G ボールを使って　・ボールの下くぐり
・玉転がし　・ボール渡し　・ボールを挟んで
・的当て　・長座でボール転がし
・シュート　・ボール奪い

（２）フラフープを使った動き遊び

・わなげ　・足回し
・フラフープくぐり　・グループでフラフープ通し
・なわとび　・投げ上げ
・腰回し　・川渡り

（３）体のバランス

・片足立ちで回転　・二人で背中を合わせて立つ
・とんぼ（なりきり）

（４）体を移動する運動遊び

・１回転，半回転，ケンステップ　・動物歩き
・マットで転がる

【場づくり】	【形態】
ステーション型	**グループ学習**
①ボール	・１グループ６～７人
②フラフープ	・１つの場にカード 10 枚
③バランス	
④力試し	

【単元の流れ】
１～２時間目：試しの運動
３～５時間目：マノランドへようこそ
（①～④の動きをグループごとにローテーション）
→○○ランドへようこそ
（人数を変えたり場を工夫してやってみよう）

子どもの実態
・ボールは１号球のボールかソフトバレーかドッチボールなら大丈夫そう。
・フラフープはできる子とできない子の差が激しい。
・キャッチボールではボールを相手がもらいやすいように渡すということが苦手。
・的当て系は大好き
→　イラストにボールを当てる，鈴を吊るしてそこに当てると音が鳴る

【後半の議論】
前半の授業内容に迫る議論を踏まえ，
この授業における目標・内容・方法・評価は一貫しているのか？
この授業の根幹を改めてグループ全体として問い直す議論を行った。

【授業の内容について】
・子どもはこれらの多様な動きに対して意欲的に活動すると思うが，それを整理して学習するということが難しいのではないか？広がりすぎている。
→　多くのことを学習してきて，それを子どもたちはどう共有（シェア）するのか。
→　共有とは，「同じ用具を使ってもこういう動きもあるんだ～」と他のグループから学ぶ。
・この授業の目標とは？→「動きの中で動くことの楽しさを学ぶことができる」
→「楽しい」だけでなく，「こだわり」まで子どもたちが学習を深めていくことが重要。
・用具を使って運動しなければならないのではなく，用具を上手く活用して遊ぶことを考える。
・「用具を使えば何でもいい」ではなく，その用具ごと（場ごと）に**キーワード**を置く。
フラフープでは「回す」。ボールなら「床につく」などキーワードを置くことで教師も評価しやすくなる。動きにもキーワードを置かないと集収のつかない授業となってしまう・・・！！
・授業の中で**「目標＝方法＝内容＝評価」**を一貫する。こちらが狙いたい動きのキーワードを準備する。用具が学習内容ではない。「〇〇を使って～できる」ものを考える。
・学習内容が抽象的だと評価の見取りが難しいのでは？広義の表現で良いのか？
・特に１年生はできるようになったことを表現できない。
・体育は安全指導・安全教育も含まれる。体育の中で子どもは「ここまですると危ない・大丈夫」という危機管理能力を高めていくことが重要。

【内容】・・・子どもの実態から考えたい。
学習内容の主語は子ども。指導内容は主語が教師。
思考判断を重んじるのか活動を重んじるのか。
モノやヒトと関わりながらどう学んでいくのか。
工夫して運動させるチカラを身につけさせたい。
楽しいには学びがなくて面白い（面が白くなる＝ハッと気づく）は学びがある。
【方法】
・キーワード
・教師が全て与えるのではなく，方向性を指し示しながら子どもがフローを創りだす。
・カードを手がかりとして創りだす。
・色んな経験＝子どもに考えるベースを与える。　→　工夫につながる

１年「体つくり運動」

【目標】
動きの中で身体を動かすことの楽しさを学ぶことができる。

【内容】

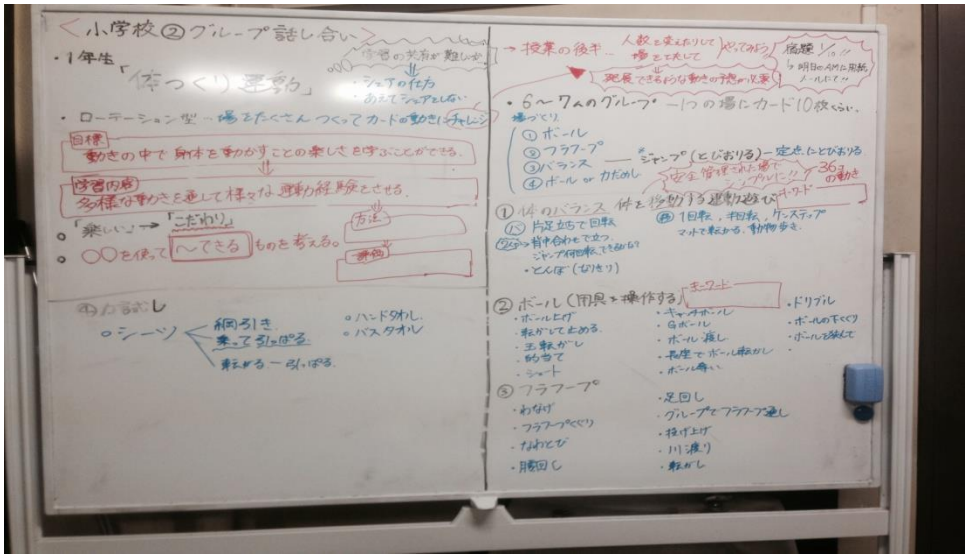
【方法】

【評価】

ここを再検討

【今回の議論で見えたこと】
グループ内で重きを置きたい場所がそれぞれ違う。
（※板書の左側か右側かでメンバーそれぞれが違う。）

この授業の骨組みの立て直し！！
学習内容からもう一度再検討を行う。



第 7 回　議事録

期　日：2015 年 1 月 9 日（金）
場　所：東大和市立第三小学校　図書室
参加者：鈴木・真野・鬼澤・松枝・成家・藤澤・中村

記録者：藤澤

1 年「体つくり運動」

【目標】
動きの中で身体を動かすことの楽しさを学ぶことができる。

【内容】
多様な動きを楽しみながら，自分たちで動きを工夫することができる。

← 多様な動きを経験することで、楽しみを感じていく。そこから、子どもたちの中で飽和状態から、自分たちで工夫して活動に取り組んでいく。自分たちで、工夫した動きをすることが楽しめるようになっていけると･･･

【方法】
次回（1 月 16 日）の議論内容

→ 方法：学習過程・学習形態・教具 etc.などの具体的授業構想

1．次回の話し合いの際に学習過程に関して、基盤として次の 3 パターンを例に考えるところから行う。

●パターンA

1	2	3	4	5
ボール	フラフープ	バランス	移動	こだわり

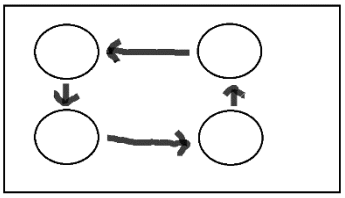
1	2	3	4	5
ボール フラフープ	バランス 移動	←こだわり→ ボール フラフープ	バランス 移動	

●パターンＣ

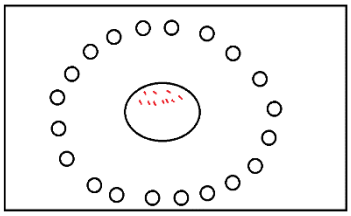
1	2	3	4	5
ボール	フラフープ	バランス	移動	こだわり
4つの場を設けてこだわり				

②こだわり（工夫）をシェアしていく方法はどのようにするか。

・ローテーション型



・円型



など、シェアしていく方法についても考えてきて話し合う。

第８回　授業検討会

期日：2015 年 1 月 16 日（金）19：00～22：30
場所：東大和市立第十小学校　図書館
参加者：鈴木先生・真野先生・松枝先生・鬼澤先生・藤澤・中村

記録者：中村

１．単元指導計画の検討

Ａパターン

これはかなり厳しい･･･。１時間ごとで終わるので１年生だから忘れる。

Ｂパターン

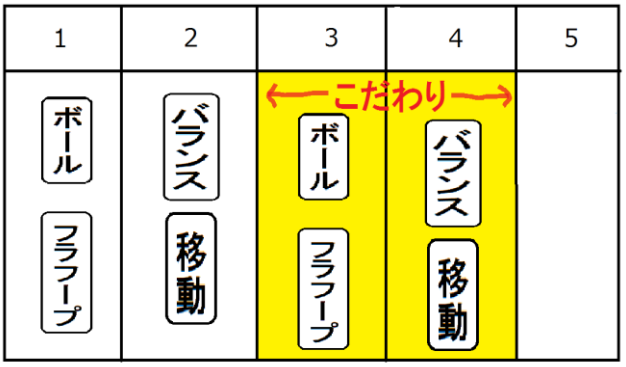
1，２時間目は教師と全体という形で教師と児童も関わりやすい。3，4，5 時間目で工夫。

Ｃパターン

経験のあとにステーションは広がりすぎるか？4 つの場が不可能･･･。

Ｂパターンで決定！

1，２時間目･････経験
3，4，5 時間目･･･工夫



２．具体的な授業内容について

（１）試しの運動について（単元 1，２時間目）の議論したこと。

★方法・活動形態についての議論

「試しの運動」では基本的な運動の例示カードを用意。それを子どもたちが引いて，引いたカードの動きを行う。そこで子どもに工夫させだすと子どもからキーワードが出てくるのでは？それを教師が取り上げて活用していく。1 時と 2 時でキーワードに沿ったカードが子どもたちから増えることが予想される。

・グループでカードを 1 枚引いて，その動きをグループで行う方がクラスの実態に合っている。

・試しの運動をカードにするとテンポが悪くなるのでは？教師が提示してそれをみんなでやるほうがサクサク進むのではないか。先生がやって子どもたちがやってという繰り返しの中で，子どもを集めて「今どんな感じだった？」みたいなフィードバックの時間。しかし，先生がかなり疲れるしネタ切れになる恐れ有り。

★試しの運動では，経験のみにするのか，工夫を入れるのかについての議論

★　試しの運動内容の検討（基本的でみんなができるようなものにする）

⇨

①体を移動する

★キーワード

・半回転　　工夫の余地：右回り・左回り
・１回転
・片足で半回転
・片足で１回転
・クマ、アザラシ、クモ、カエル　工夫の余地：動物歩きの種類、音楽に合わせて歩く、競争
・指さしでジャンプ、ステップ

②用具を操作する（ボール）

★キーワード　ボールを落とさない，ねらったところに投げる・取る

【１人】
・投げる⇔取る　　工夫の余地；高さ、人数、距離、ボールの大きさ
・バウンド⇔取る
・投げて→手たたき→取る
・取る
・はじく（ドリブル？）
・バウンド
【２人】
・転がす
・キャッチボール
・ボール送り

③用具を操作する（長縄・短縄・ゴム紐）※カードなし

★キーワード

・大波、小波　　工夫の余地：人数を増やして飛ぶ，連続とび（回数），時間制（タイマー）
・とぶ
・ヘビ
・くぐる
・グーパー

※フラフープは小学１年生には操作が難しい（体型など考慮して）ので縄系に変更しました。

④体のバランス

★キーワード

ＮＧ：移動がメインになってしまうようなバランス

・立つ　　工夫の余地：じゃんけん、お手玉の数、人数
・起きる
・乗る
・わたる（平均台・ケンステップ）
・座る
・寝転ぶ
・回る
・お手玉をのせる
・お宝（ペットボトルなど）のせて
・転がる

（２）真野ランド（単元 3，4，5 時間目）についての議論

・真野ランドでの活動形態はステーション？円？
・ここでは「〇〇ランドへようこそ」につながるような動き。
→真野ランドでは，試しの運動の総復習を行うというイメージ。
・この時点で，試しの運動の中で子どもたちが工夫したカードがかなり増えているはず（※試しの運動で工夫を入れる場合）。

試しの運動の総復習
①体を移動する
②用具操作（ボール）
③用具操作（縄系）
④体のバランス

（３）〇〇ランドについて（単元 3，4，5 時間目）の議論

〇〇ランド＝工夫がテーマ！！カードを増やしていく（工夫していく）喜び。
・無法地帯になりそうなので，円形にした方がいいかも。
・教員の持って行きたい方向をきちんと持っておかないと危険。下手したら教師主導になる恐れもある。教師の声かけで持って行きたい方向に持って行くか・・・？
・系統性で考えるなら，〇〇ランドでもグループ活動にした方が良い！？
その方が活動しやすいのでは？
・カードにキーワードを置いて，工夫させる？
「キャッチボール」というキーワードを置いて，人数を変えたりとか。

次回 3，4，5 時間目の内容について重点的に話し合う！
（試しの運動・真野ランド・〇〇ランドでの活動形態やキーワードなど色々決める）
（試しの運動を実際に実践してみる！！！！）

３．これからやること

・カードづくり（Ａ４かＢ５くらい）
・準備運動を作る（音楽に合わせた表現・覚えるのが大変なので真似っこ系・単純な）
・指導案作成
・学習カード（4 項目の〇×）
・活動中の音楽（タイムキーパー代わり）
・アンケート（子どもの体力テストの結果も含めて）
・この単元のワールドテーマを考えてくる
・動きのキーワードの検討？

第 9 回　授業検討会

期　日：2015 年 1 月 24 日（土）14:00～19:00
場　所：東大和第三小学校　図書室
参加者：鈴木・松枝・鬼澤・真野・藤澤・戸川・久保・中村（敬称略）

記録者：中村

１. 今後の日程の決定

【体つくり授業実践日】　東大和第三小学校

第 1 時	1 月 28 日（水）	11：30～12：15	
第 2 時	2 月 3 日（火）	13：35～14：20	
第 3 時	2 月 6 日（金）	13：35～14：20	※その後話し合い
第 4 時	**2 月 10 日（火）**	**11：30～12：15**	
第 5 時	2 月 12 日（木）	11：30～12：15	※その後久保君お別れ会～？

【今後の話し合い日程】

・1 月 30 日（金）18：30～21：00　　東大和第 10 小学校
・2 月 6 日（金）　実践後 14：20～　　東大和第 3 小学校

２．授業内容の検討

・動きの検討
・準備体操の考案
・教具づくり

第 10 回　授業検討会

期　日：2015 年 1 月 30 日（金）　18：30～21：00
場　所：東大和第 10 小学校　図書室
参加者：鈴木先生・松枝先生・真野先生・鬼澤先生・藤澤・久保・中村

記録者：中村

１．指導案検討

⑴　発表会資料に添付するもの

・体つくり指導案
・学習カード
・教具のカード
・鬼遊び指導案
・学習カード
・掲示カード
・議事録
・心想カード

⑵　指導案の修正　→　全員で確認しながら

誤字・脱字など
内容の検討（学習過程・評価基準・本時などの修正）

２．第１時を振り返って

⑴　授業者から（真野先生・久保先生から）

・回る動きの捉え方・・・バランスと移動の動きは重なる点がある
　軸を持ってその場で回る→バランス　　円を描くように回り動く→移動
・意外と子どもから工夫が多く出てきた。

⑵　観察者から（鬼澤先生）

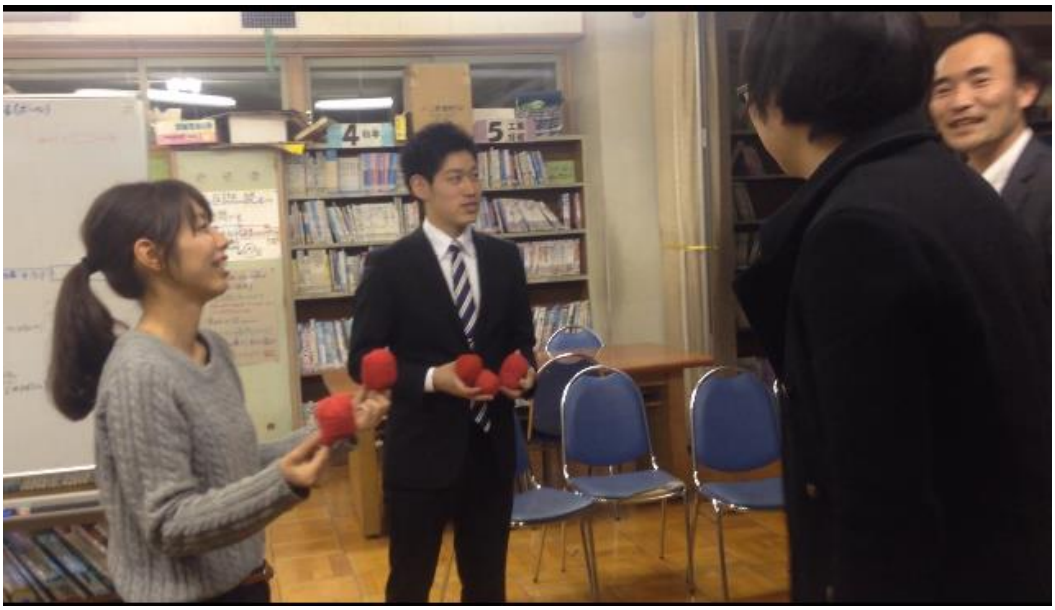
・子どもが自分たちで工夫できているから，あまり教師が教えすぎない方がいい。
・久保氏が準備運動を覚えて第二時に臨む。

３．第２時に向けて

【第２時の流れ】

・準備運動（久保氏中心で）
・動きの紹介（子ども）
　→バランス崩し，手押し相撲（ペアで）
・良い動き紹介
・次の動きの紹介（子ども）
　→二人組で一緒に立つ（背中で立つ・正面で手を組んで）
　→教師の声かけで人数を増やしていく
・お手玉の動き紹介（久保）
　→頭の上に乗せて歩いたりなど

・良い動きを紹介
・おおなわを使って（４チームで７・７・７・６）各チーム縄１本
※動きは子どもたちに考えさせる。教師が言い過ぎないように注意する。
・学習カード記入

【これからの検討】

・「工夫」と「チャレンジ」を融合させてもいいのではないか。今までの時間でできなかったことをチャレンジする時間としても良いのでは？15 分も工夫し続けられるか？
・マノランドは今までの動きをたくさん経験する・振り返る時間
・クボランドは今までの動きに挑戦したり，新たな動きを工夫する時間